

熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

# 瀬戸山遺跡・山ヶ谷戸遺跡



熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

せ と や ま い せ き      や ま が   や   ど   い   せ き  
瀬戸山遺跡・山ヶ谷戸遺跡

2 0 1 1

埼玉県熊谷市遺跡調査会

# 序

平成 17 年 10 月 1 日、熊谷市、大里町、妻沼町の一市二町が合併し、さらに平成 19 年 2 月 13 日、江南町と合併して、新『熊谷市』が誕生いたしました。

新『熊谷市』は、南北約 20 km、東西約 14 km にわたり、面積は 159.88 km<sup>2</sup>、人口は 20 万人を超えることとなり、県北最大の都市として生まれ変わりました。新市は、関東平野を縦横に流れる荒川と利根川の二大河川が最も近接する流域に位置し、平坦な地形に肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。

こうした自然環境のもと、新市内には先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

本書は、熊谷市遺跡調査会において平成 21 年に発掘調査を行った瀬戸山遺跡及び山ヶ谷戸遺跡について報告するものであります。瀬戸山遺跡からは奈良・平安時代の集落跡がみつき、江南台地上の生活圏の広がりが確認されました。また、山ヶ谷戸遺跡からは福川を水源とした、幅広い年代にわたる用水路が確認され、土地利用の一端が窺えました。これらは本市の歴史的発展を考証する上でも非常に重要なものといえます。本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、ご理解ご協力を賜りました KDD I 株式会社並びに地元関係者の皆様には厚くお礼申しあげます。

平成 23 年 3 月

熊谷市遺跡調査会  
会長 野原 晃

# 例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市楊井字沼上 1657 番地 1 に所在する瀬戸山遺跡（埼玉県遺跡番号 59-028）及び埼玉県熊谷市上根字向前田 947 番地に所在する山ヶ谷戸遺跡（埼玉県遺跡番号 61-073）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は携帯電話用電波塔の建設に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市遺跡調査会が実施したものである。
- 3 本事業の組織は、第 I 章 3 のとおりである。
- 4 発掘調査期間は次のとおりである。
  1. 瀬戸山遺跡 平成 21 年 10 月 1 日から平成 21 年 11 月 6 日
  2. 山ヶ谷戸遺跡 平成 21 年 9 月 7 日から平成 21 年 9 月 28 日
- 5 発掘調査は熊谷市教育委員会 新井 端、吉野 健、蔵持俊輔が担当した。報告書執筆・編集は、蔵持が行った。また、熊谷市教育委員会社会教育課の職員の支援を受けた。
- 6 発掘調査に係る写真撮影は、新井、吉野、蔵持が行った。遺物の写真撮影は、蔵持が行った。
- 7 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 8 本書の作成にあたり、下記の方々からご教示、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。  
(敬称略、五十音順)  
内田勇樹 金子正之 菅谷浩之 長谷川一郎 原野真祐

# 凡 例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 遺構挿図の縮尺は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

瀬戸山 : 調査区全測図…1/120 住居跡・土坑…1/40 遺構断面図…1/40

山ヶ谷戸 : 調査区全測図…1/80 住居跡・土壇…1/60 遺構断面図…1/60

遺構の略記号は、次のとおりである。

S I : 竪穴住居跡 SK : 土壇・土坑 SD : 溝 SE : 井戸 P : ピット

- 2 遺構挿図中のスクリーントーン等は次のとおりである。

 = 地山

- 3 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

- 4 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土師器・須恵器・陶器…1/4 鉄製品…1/2

- 5 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

土師器 : 白抜き 須恵器 : 黒塗り 陶器 : 

実測図の中心線は実線で示している。

- 6 遺物拓影図のうち、向かって左に外面、右に内面を示した。

- 7 遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

分量の単位はcm、gである。( ) が付されるものは推定値、現存値を表す。胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で、含有量の多い順に示した。

A…白色粒子 B…黒色粒子 C…赤色粒子 D…褐色粒子 E…赤褐色粒子 F…白色針状物質 G…長石 H…石英 I…白雲母 J…黒雲母 K…角閃石 L…片岩 M…砂粒 N…礫

- 8 写真図版の遺構・遺物の縮尺は、すべて任意である。

- 9 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局編集、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994）を参考にした。

# 目次

序	挿図目次
例言	瀬戸山遺跡
凡例	第1図 埼玉県の地形図(瀬戸山遺跡位置図)……6
目次	第2図 周辺遺跡分布図……………8
I 発掘調査の概要……………1	第3図 調査地点位置図……………10
1 調査に至る経過……………1	第4図 全測図……………11
2 発掘調査・報告書作成の経過……………2	第5図 基本土層図……………11
(1) 発掘調査……………2	第6図 第1号住居跡……………14
(2) 整理・報告書作成作業……………2	第7図 第1号住居跡出土遺物……………15
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織……………3	第8図 第2号住居跡……………16
II 瀬戸山遺跡	第9図 第2号住居跡出土遺物……………17
1 遺跡の立地と環境……………6	第10図 第1号土坑・出土遺物……………19
2 遺跡の概要……………9	第11図 ピット(P 01～20)……………20
(1) 調査の概要……………9	山ヶ谷戸遺跡
(2) 検出された遺構と遺物……………12	第12図 埼玉県の地形図(山ヶ谷戸遺跡位置図)……24
3 遺構と遺物……………13	第13図 周辺遺跡分布図……………26
(1) 住居跡……………13	第14図 調査地点位置図……………28
(2) その他の遺構……………19	第15図 全測図……………30
4 調査のまとめ……………21	第16図 基本土層図……………31
III 山ヶ谷戸遺跡	第17図 第1号溝跡……………32
1 遺跡の立地と環境……………24	第18図 第2・3号溝跡……………33
2 遺跡の概要……………29	第19図 第5号溝跡……………34
(1) 調査の概要……………29	第20図 第6・8・10号溝跡……………35
(2) 検出された遺構と遺物……………29	第21図 第4・7・9・12号溝跡……………37
3 遺構と遺物……………31	第22図 第11号溝跡……………39
(1) 溝跡……………31	第23図 第1号井戸跡……………40
(2) 井戸跡……………40	第24図 第2号井戸跡……………40
(3) その他の遺構……………42	第25図 第1号土壇……………41
(4) 出土遺物……………42	第26図 用途不明遺構……………41
4 調査のまとめ……………43	第27図 ピット……………42
	第28図 出土遺物……………43

挿表目次

瀬戸山遺跡

第1表	周辺遺跡一覧表	9
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表	15
第3表	第2号住居跡出土遺物観察表	18
第4表	ピット計測表	20

山ヶ谷戸遺跡

第5表	周辺遺跡一覧表	27
第6表	出土遺物観察表	43

写真図版目次

瀬戸山遺跡

図版1	全景	第1号住居跡
図版2	第1号住居跡	第2号住居跡
	第1号土坑	ピット群
図版3	第1号住居跡	第7図1・2・7～9・ 11～15
図版4	第1号住居跡	第7図10・16・17
	第2号住居跡	第9図1・2・5～10
図版5	第2号住居跡	第9図11～16・18～21
	第1号土坑	第10図1

山ヶ谷戸遺跡

図版6	全景		
図版7	第4号溝跡	第7号溝跡	第9号溝跡
	第12号溝跡	第3号溝跡馬歯出土状況	
	第1号井戸跡	第2号井戸跡	
	出土遺物	第25図1～4	

# I 発掘調査の概要

## 1 調査に至る経過

平成 21 年 5 月 26 日付けで KDD I 株式会社 北関東エンジニアリングセンター長 皆川 聡氏より携帯電話の電波塔の建設に係る埋蔵文化財発掘の届出が提出され、埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて協議があった。予定地が 2 地点あり、①は山ヶ谷戸遺跡に該当し、②は瀬戸山遺跡に該当する。これを受け、熊谷市教育委員会では①について 6 月 23 日、②について 6 月 12 日に所在確認調査を実施したところ、①は複数の溝跡、土壌等の遺構、②は竪穴建物跡等の遺構が検出された。この結果を踏まえて、①は平成 21 年 7 月 29 日付け熊教社発 1261 号にて、②は平成 21 年 7 月 29 日付け熊教社発 1263 号にて熊谷市教育委員会教育長より北関東エンジニアリングセンター長 皆川 聡氏あてに次のように回答した。

建設予定地は埋蔵文化財包蔵地（①山ヶ谷戸遺跡、②瀬戸山遺跡）である。当該地は現状保存を行うか、埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず現状変更する場合には、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること。

その後、保存策について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。

事業主と具体的な協議を重ねたところ、早急に建設を開始したい意向があったが、調査実施には 9 月定例議会での 9 月補正予算の承認が必要であり、待機期間が発生する状況であった。そのため、熊谷市教育委員会では、工事の進捗に配慮し早急に発掘調査を実施する必要が生じた。そこで、平成 21 年 7 月 21 日付けで埋蔵文化財に関する協定を事業主と締結したうえで、平成 21 年 8 月 21 日に熊谷市遺跡調査会を設立し、発掘調査を①は 9 月 7 日から、②は 10 月 1 日から実施した。

発掘調査に先立ち、文化財保護法第 93 条第 1 項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が KDD I 株式会社 北関東エンジニアリングセンター長 皆川 聡氏より前述のとおり提出され、熊谷市教育委員会は副申を添えて埼玉県教育委員会教育長へ送付した。これに対し、①は平成 21 年 7 月 16 日付け教生文第 4 - 364 号、②は平成 21 年 7 月 16 日付け教生文第 4 - 366 号で発掘調査実施について指示通知があった。

熊谷市遺跡調査会会長は、①について文化財保護法第 92 条第 1 項の規定に基づく発掘調査の届出を平成 21 年 9 月 4 日付け熊籠遺発 5 号で提出し、熊谷市教育委員会は副申を添えて埼玉県教育委員会教育長へ送付した。これに対し、平成 21 年 9 月 28 日付け教生文第 2 - 34 号で発掘調査について通知があった。

②について文化財保護法第 92 条第 1 項の規定に基づく発掘調査の届出を平成 21 年 9 月 4 日付け熊籠遺発 6 号で提出し、熊谷市教育委員会は副申を添えて埼玉県教育委員会教育長へ送付した。これに対し、平成 21 年 9 月 28 日付け教生文第 2 - 35 号で発掘調査について通知があった。

## 2 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

#### ①山ヶ谷戸遺跡

山ヶ谷戸遺跡の発掘調査は、平成21年9月7日から平成21年9月25日にかけて行われた。調査面積は、電波塔の建設によって破壊を受ける179.93㎡であった。

調査は、重機により遺構確認面まで表土を除去し、作業員により遺構確認作業を行った。その後、順次遺構を精査し、遺構平面図・断面図を作成し、随時個別の写真撮影を行った。9月23日には調査区全景の写真撮影を行い、9月25日には現場の埋戻し作業を終了し、器材等を撤収して現場における作業を終了した。

#### ②瀬戸山遺跡

瀬戸山遺跡の発掘調査は、平成21年10月1日から平成21年11月10日にかけて行われた。調査面積は、電波塔の建設によって破壊を受ける165.00㎡であった。

調査は、重機により遺構確認面まで表土を除去し、作業員により遺構確認作業を行った。その後、順次遺構を精査し、遺構平面図・断面図を作成し、随時個別の写真撮影を行った。11月6日には調査区全景の写真撮影を行い、11月10日には現場の埋戻し作業を終了し、器材等を撤収して現場における作業を終了した。

### (2) 整理・報告書作成作業

整理作業は平成22年4月1日より開始し、遺物の洗浄・注記・復元実測作業、遺構の図面整理、遺構・遺物図面のトレース作業・図版組み、遺物写真撮影、遺構・遺物写真の図版組みを行い、12月に原稿執筆・割付を実施した。翌年1月に報告書の印刷に入り、校正を行った後、3月31日に本報告書を刊行した。

### 3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

#### 平成 21 年度 発掘調査

主 体 者	熊谷市遺跡調査会
会 長	野原 晃 (熊谷市教育委員会教育長)
副 会 長	柴崎 久 (熊谷市教育委員会教育次長)
理 事	菅谷浩之 (熊谷市文化財保護審議会会長) 小柴 清 (熊谷市文化財保護審議会委員)
監 事	小林常男 (熊谷市教育委員会教育総務課長)
事 務 局 長	斉木千春 (熊谷市教育委員会社会教育課長)
事務局次長	小林英夫 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護担当副参事)
統括調査員	新井 端 (熊谷市教育委員会社会教育課副課長兼文化財保護係長)
調 査 員	寺社下博 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査) 吉野 健 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査) 蔵持俊輔 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任) 長谷川一郎 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係発掘調査員) 原野真祐 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係発掘調査員)

#### 平成 22 年度 整理調査

主 体 者	熊谷市遺跡調査会
会 長	野原 晃 (熊谷市教育委員会教育長)
副 会 長	藤原 清 (熊谷市教育委員会教育次長)
理 事	菅谷浩之 (熊谷市文化財保護審議会会長) 小柴 清 (熊谷市文化財保護審議会委員)
監 事	正田和久 (熊谷市教育委員会教育総務課長)
事 務 局 長	斉木千春 (熊谷市教育委員会社会教育課長)
事務局次長	小林英夫 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護担当副参事)
統括調査員	新井 端 (熊谷市教育委員会社会教育課副課長兼文化財保護係長)
調 査 員	寺社下博 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査) 吉野 健 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査) 蔵持俊輔 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任)



## II 瀬戸山遺跡

# 1 遺跡の立地と環境

熊谷市は埼玉県北部に位置する。市の南側には荒川、北側には利根川がそれぞれ西から南東方向に向かって流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には市の西側に櫛挽台地、北・東側に妻沼低地、南側は江南台地が広がる（第1図）。

櫛挽台地は洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へは熊谷市北西部の西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mで妻沼低地に向かって緩やかに下っていく。

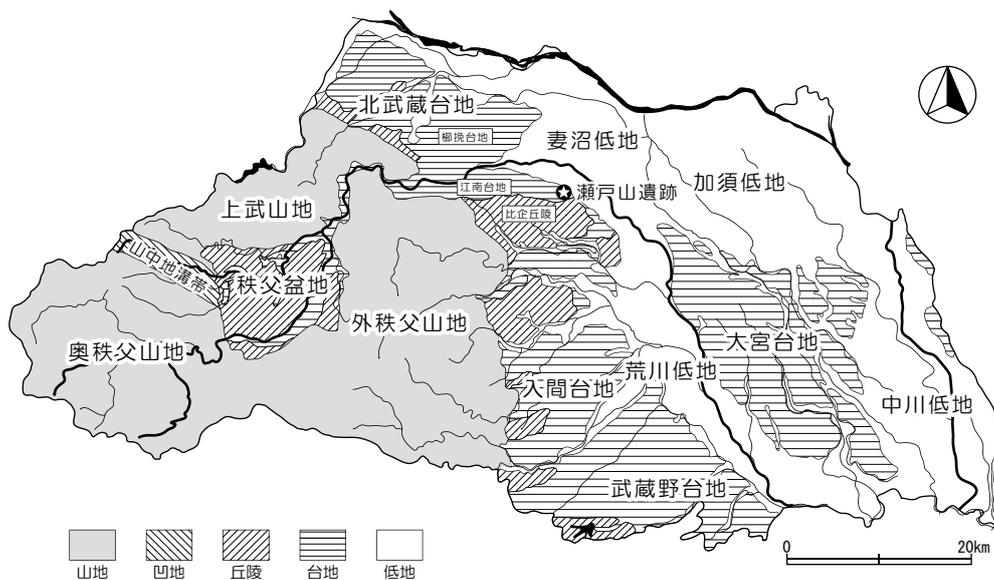
櫛挽台地の東側には沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。新荒川扇状地は熊谷市の南西に位置する深谷市の菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。また、三ヶ尻地区の荒川に面した櫛挽台地南東端には丘陵地である観音山（標高81m、第3紀層の残丘）があり、台地上からの比高差は約25m、沖積地からの比高差は約35mである。

今回報告する瀬戸山遺跡は舌状に発達した江南台地東端の標高27～47mに立地する。瀬戸山遺跡とほぼ重複する範囲で瀬戸山古墳群が広がっている。過去に数回の調査が行われ、前方後円墳1基、円墳20基を数える古墳時代後期の群集墳と確認している。

次に本遺跡周辺の歴史的環境を江南台地東部を中心に概観する。

旧石器時代は江南台地上で遺跡が確認され、鹿嶋遺跡、塩西遺跡、本田東台遺跡、荒神脇遺跡などで礫群やナイフ型石器を検出している。また深谷市白草遺跡では細石器のブロックや荒屋型彫器を検出している。

縄文時代は草創期よりみられるが、有舌尖頭器などの石器の検出が多く、土器の検出は諸ヶ谷遺跡、萩山遺跡で爪形文系、船川遺跡で多縄文系の破片が出土している。また新たに、原谷遺跡で遺物包含層より多縄文系土器が石器と共に確認された。



第1図 埼玉県の地形図（瀬戸山遺跡位置図）

早期の遺跡は江南台地東部に増加がみられる。県内でも有数の集落跡といえる萩山遺跡では、撚糸文期の住居跡を20軒余り検出しており、スタンプ形石器を200点以上が出土している。また、船川遺跡では、貝殻沈線文系土器が出土し、押型文系土器や無文土器との共伴関係が確認されている。他には、鹿嶋遺跡、宮脇遺跡、南方遺跡で撚糸文期後半の住居跡が検出されている。この他にも遺物を検出した遺跡は数多く、早期の遺跡が集中して確認される傾向がみられることから、江南台地の地形は早期段階の立地に適した環境であったと考えられる。

縄文時代前期は江南台地西部で遺跡が増加する傾向がみられるが、台地東部での検出例は少ない。中期になると、確認された遺跡は微増し、加曾利E式土器には集落跡が一気に増加する。本遺跡周辺では、吉野川沿いに遺跡がみられ、大規模集落といえる深谷市上本田遺跡では、環状に配置された住居跡が検出され、拠点集落の一つといえる。

縄文時代後期に入ると、低地へ進出と遺跡が減少する傾向がみられ、その傾向は晩期には顕著となる。本遺跡周辺は萩山遺跡より称名寺式期の住居跡を7軒、姥ヶ沢遺跡からは堀之内式期の住居跡を2軒検出している。晩期は終末の浮線文土器が採取されているのみである。

弥生時代の初期段階は低地での活動がみられ、本遺跡周辺では後期に入ってから小規模な集落を主体にみられるようになる。円山遺跡では南関東地方の久ヶ原式土器を伴う方形周溝墓が検出されている。

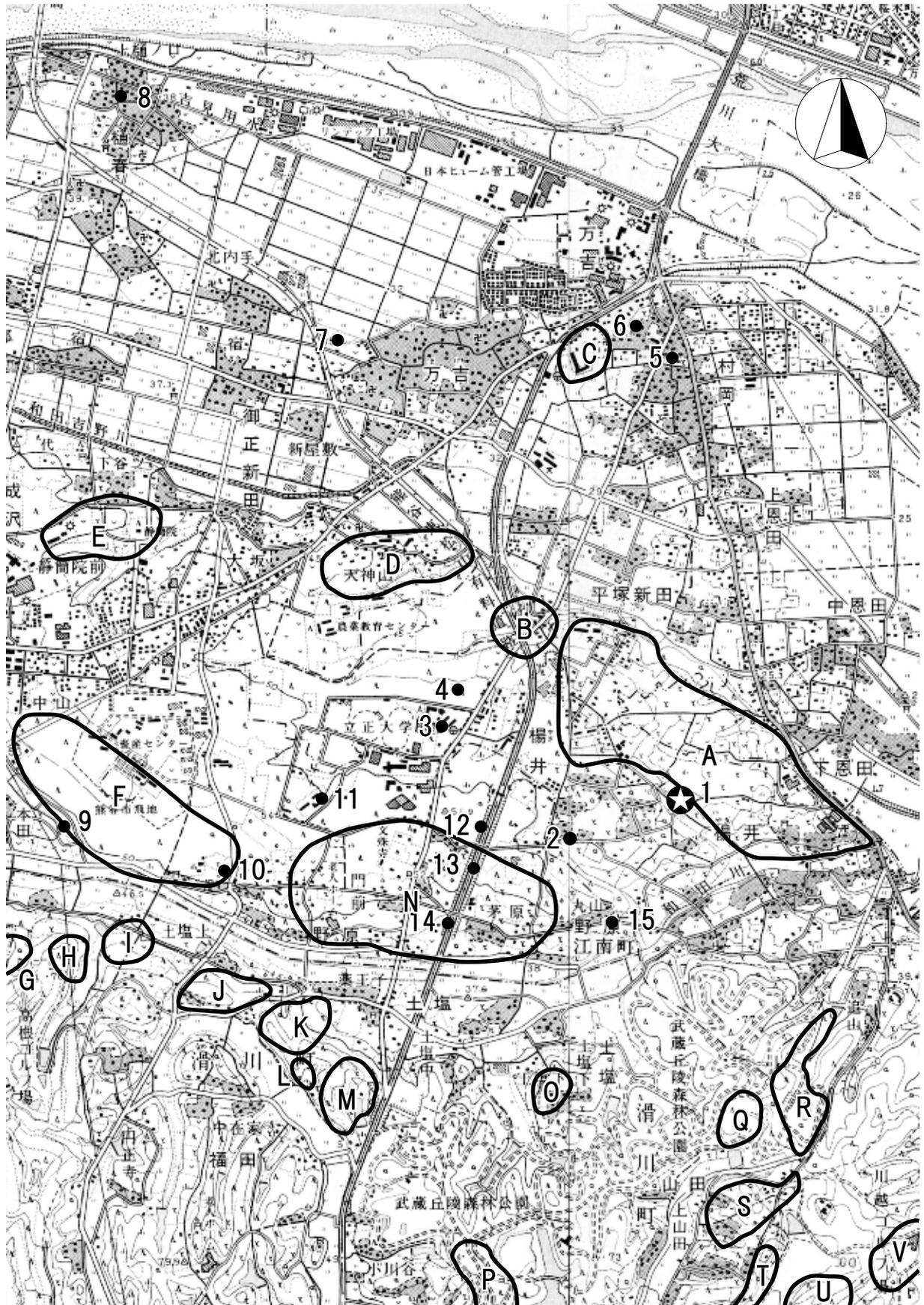
古墳時代前期は、南側の松山台地では集落跡の増加がみられる、本遺跡周辺は点在するに留まるが、塩地区に集中する傾向があり、塩西遺跡からは祭祀土坑より40個体以上の遺物が検出されている。

中期は確認されている遺跡は数少ない。塩新田遺跡において住居跡が1軒みられるだけであり、周辺地域では白草遺跡より住居跡が8軒検出されている。

後期になると、遺跡の数は再び増加する。野原古墳群と関連があると考えられる本田東台遺跡は6世紀後半から8世紀代まで営まれた集落である。古墳に目を向けると、群集墳が多数存在し、台地・丘陵上の開析谷に面する場所には無数の古墳群が所在する。同期の古墳群は主に小規模な前方後円墳と円墳群とで構成されており、本遺跡と範囲を同じくする瀬戸山古墳群もこれにあてはまる。この他、生産遺跡として、姥ヶ沢・権現坂埴輪窯跡等があり、工房跡、粘土採掘坑、還元焼成された円筒埴輪が出土しており、広域にわたる供給圏を有していたと考えられる。

律令体制の始まる奈良・平安時代には、本遺跡周辺は武蔵国男衾郡に属していたと想定される。遺跡は古墳時代後期より継続するものが多く、規模も大きくなる。本遺跡周辺でも荒神脇遺跡や岩比田遺跡から数十軒に及ぶ住居跡が検出されている。また、深谷市百済木遺跡からは、有力者層の居宅と考えられる、大型の掘立柱建物跡や大型住居跡を有する集落跡が検出されている。寺院関連では、基壇建物や宗教関連遺物、「花寺」の墨書土器等が検出された寺内廃寺があり、その南には式内社・出雲乃伊波井神社がある。その他、金銅仏の出土が伝えられる深谷市諦光寺跡等がある。

中世の遺跡は本遺跡の北方に村岡館跡が所在し、付近の茶臼塚には大型の板碑が伝わっている。また、近隣の元境内遺跡は、増田氏の館跡を発祥とし、文殊寺西方には土塁と空堀が一部遺存している。近年調査された合羽山遺跡では、墓域が確認され、大型の板碑や渥美・常滑壺、在地産壺・羽釜の蔵骨器を検出している。この他、深谷市、滑川町等周辺には館跡をはじめ多数の遺跡がみられる。野原古墳群では、古墳時代後期の古墳から鑄造製の阿弥陀仏が出土した例があり、経塚として利用された様子が窺える。



第2図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	瀬戸山遺跡	縄文中、古墳前～後、奈良・平安、江戸	9	本田東台遺跡	旧石器、縄文早、古墳後
2	No.3 2遺跡	古墳	10	宮脇遺跡	旧石器、縄文早、古墳後
3	立正大学熊谷校地内	中・近世	11	鹿嶋遺跡	旧石器、縄文早、弥生?、奈良・平安
4	下原遺跡	縄文	12	下新田遺跡	奈良・平安
5	下北原遺跡	奈良・平安	13	荒神脇遺跡	旧石器、縄文早、奈良・平安
6	村岡館跡	平安末～中世	14	熊野遺跡	奈良・平安
7	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世	15	丸山遺跡	古墳前～後
8	平山館	中・近世			

古墳群

熊谷市			K	天神山横穴古墓群	古墳後
A	瀬戸山古墳群	古墳後	L	天神前古墳群	古墳後
B	万吉下原古墳群	古墳前・後	M	馬場古墳群	古墳後
C	村岡古墳群	古墳後	O	山の上古墳群	古墳後
D	天神山古墳群	古墳後	P	ゴエモン塚古墳群	古墳後
E	澗簡院古墳群	古墳後	Q	菖蒲沼古墳群	古墳後
F	野原古墳群	古墳後	R	追山古墳群	古墳後
G	石橋山古墳群	古墳後	S	棘山古墳群	古墳後
N	野原東古墳群	古墳後	東松山市		
滑川町			T	市の坪古墳群	古墳後
H	円正寺古墳群	古墳後	U	三千塚・第Ⅶ支群	古墳後
I	山中古墳群	古墳後	V	三千塚・第Ⅴ支群	古墳後
J	蟹沢古墳群	古墳後			

## 2 遺跡の概要

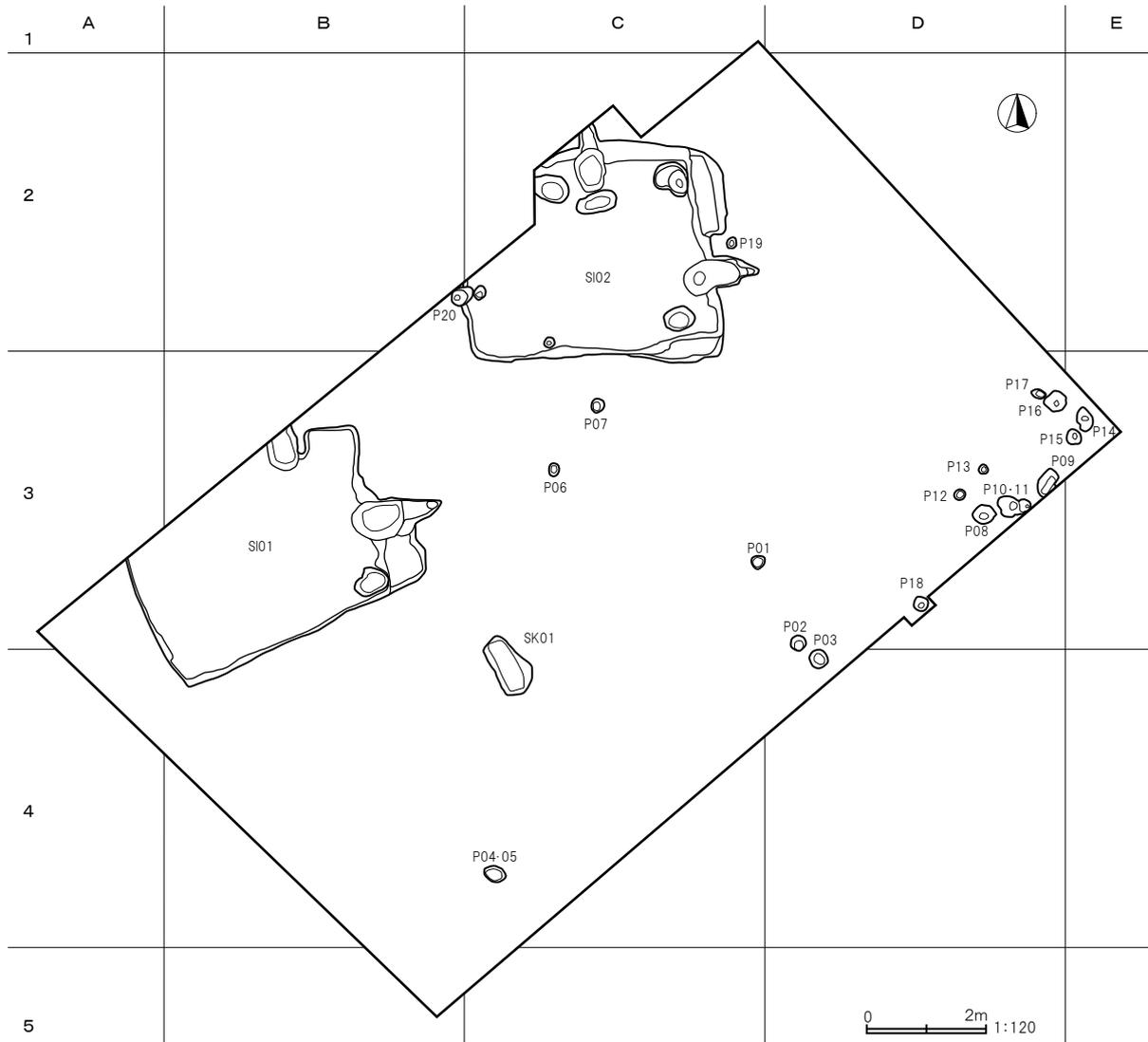
### (1) 調査の概要

発掘調査の方法は、1辺5mのグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、北西隅をA-1として南へA・B・C…、東へ1・2・3…とし、Aラインは東から西へA-1・A-2・A-3…と呼称した。Bライン以南もAラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。配置状況は第4図を参照してください。

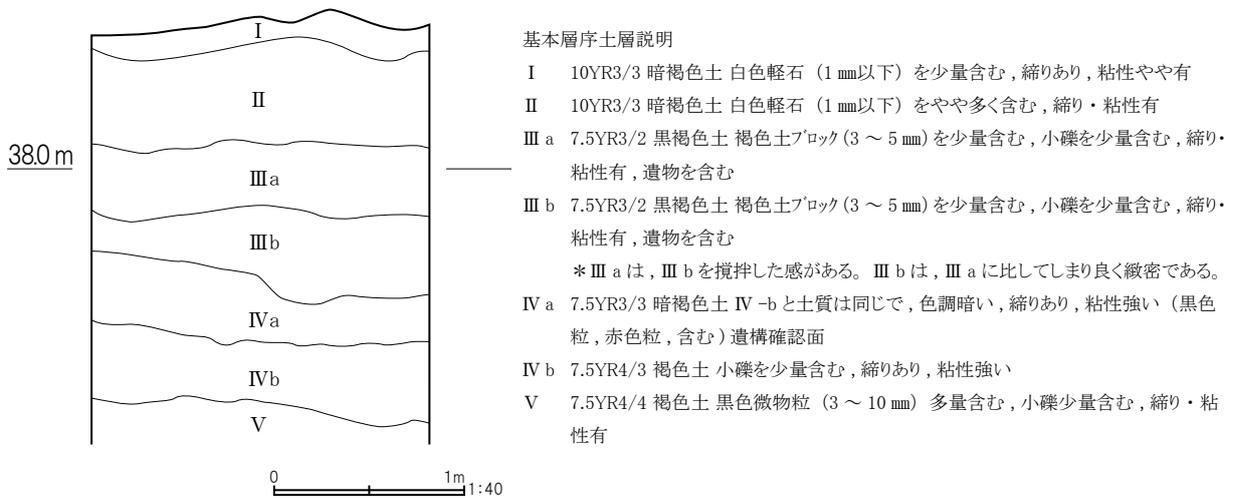
発掘調査は、重機による遺構確認面までの表土剥ぎを行った後、上記グリッドの設定を行った。なお座標は、世界測地系に基づく基準点測量による。グリッド設定後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。雨の影響からか、湧水が発生し、調査に支障があったため、やむなく水切り溝を必要箇所に設定している。遺物は必要に応じて写真撮影・実測後、慎重に取り上げを行った。遺構も遺物同様必要に応じて写真撮影した後、実測を行った。そして最後に遺構全体の写真撮影を行い調査を終了した。



第3図 調査地点位置図



第4図 全測図



第5図 基本土層図

## (2) 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構と遺物は、遺構が竪穴住居跡 2 軒、土坑 1 基、ピット 20 基であり、出土遺物は、土師器、須恵器、刀子、石鏃、縄文土器である。縄文時代に係る遺物は微量であり、表層からの検出であり、流れ込みとみられ図示できるものはなかった。土師器、須恵器、刀子は奈良・平安時代のものである。

2 軒の住居跡は調査区の北寄りから検出されている。いずれも、北壁と東壁にそれぞれカマドが付設されている。また主軸方向もほぼ一致しており、特徴からは同時期に存在した可能性が考えられる。南西寄りに検出された第 1 号住居跡では、東壁に付設されたカマドは内壁の北面では被熱による焼土化が著しくみられるが、南面では確認されていない。北壁に付設されたカマドは崩落土中に焼土ブロックが含まれ、カマド内や周辺から多量の土師器甕や坏が出土している。北東寄りに検出された第 2 号住居跡では、東壁に付設されたカマドは壁面を掘り込んで燃焼部が作られ、内壁が被熱によって著しく焼土化している。北壁に付設されたカマドは遺存状態が不良であり、被熱による焼土化も認められていない。出土した遺物から時期は、いずれの住居跡も 8 世紀後半から 9 世紀前半と考えられる。

土坑は調査区の中央やや南西寄りに検出されている。東壁際の北寄りから刀子が出土しており、土坑墓の可能性はある。

ピットは、調査区の北東端にまとまって検出されている。さらに調査区東側に広がると考えられ、調査できた範囲での配列からは規則性を捉えることが難しく、建物跡などの想定は出来なかった。

住居跡をはじめ検出された遺構は、調査区の北半を中心として検出されている。調査区が北から南に下る傾斜地にあることから、集落の中心はより高位にあたる北方にあるものと考えられる。

### 基本層序

調査区に堆積する土層は全体に粘性があり、乾燥するとかなり硬い土質である。Ⅰ・Ⅱ層は暗褐色の耕作土及び表土層で、白色軽石を含む攪拌された土層である。Ⅲ層は黒褐色土層で、わずかながら縄文土器片や土師器片が出土している。土質はわずかに差が見られ、上層をⅢ a 層、下層をⅢ b 層と細分した。Ⅲ a 層は下層のⅢ b 層を攪拌した感があり、Ⅲ b 層はⅢ a 層に比して緻密である。この層から上位の土層は調査区全域を覆っている。Ⅳ層はロームに似る褐色から暗褐色の土層であり、遺構はこの層を切って構築されていて表土除去はこの層上面までとした。色調は調査区域内の地点によって異なり、やや暗い色調のものをⅣ a 層、明るいものをⅣ b 層と細分した。Ⅳ a 層はⅣ b 層の上位にあたり、地形が高くなる調査区の東寄りでは確認されていない。Ⅴ層は褐色土層で粘性があり硬い土質である。黒色鉱物粒を多量に含んでいる。Ⅴ層より下位は小礫を多く含むようになり、さらに下位は河原石状の礫（転石）が主体となってゆく。

## 3 遺構と遺物

### (1) 住居跡

#### 第1号住居跡(第6図、第7図、第2表)

※湧水のため、やむなく住居床面北に水切り溝の掘削を行った。北カマドが付設された部分については迂回させて掘削した。

**位置** A-3、B-3・4グリッドに位置する。

**形状・規模** 北側が調査区外へと延びているため全容は不明である。確認できた南辺では張り出し部を含めた長さで南辺4.5m、東辺では2.9mである。西辺と南辺はほぼ直交するが、東辺と南辺の角度は60°と開き、形状は不整形な方形を呈する。深さは遺存の良好な東寄りでは0.30mほどあるが西寄りでは0.10mと浅い。主軸方向は南辺での計測でN-65°-E、西辺での計測でN-26°-Wを示す。カマドは北壁と東壁から計2基が検出された。平面形が整った方形になっていないことや、カマドが2基検出されていることを考え合わせると建て替えが行われた可能性があるが、床面の高低差や堆積土の観察によってもその新旧関係を捉えることはできなかった。

**床面** 床面は地山を直接床としている。凹凸があり部分的に小礫が露呈している。

**棚状施設** 東カマド以南の東壁には棚状施設が付設されている。長さ0.70m、奥行0.75mの規模であり、床面から4cmほどの高まりで、東壁面より緩い傾斜を呈する。東カマドの南半はこれにより切られる。

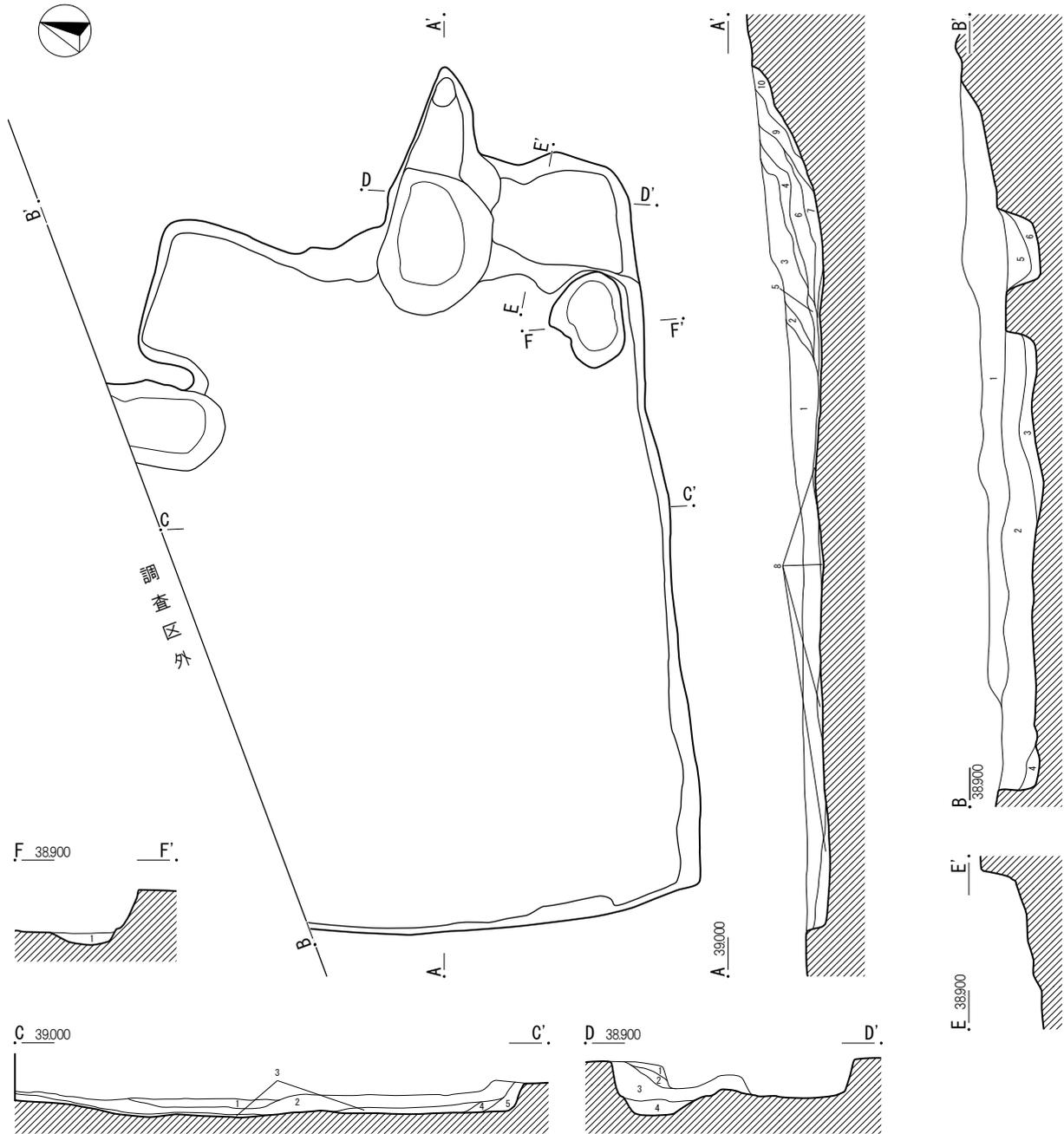
**堆積土** 粘性が強く締まりのある黒褐色土や暗褐色土を主体であり、炭化物、焼土粒子が含まれる。レンズ状堆積を呈しており、自然堆積と考えられる。

**カマド** カマドは2基検出され、北壁東寄りと東壁中央に付設されている。東壁のカマドは内壁北面が著しく焼土化している。北壁のカマドは崩落土中に焼土ブロックが含まれ、カマド内や周辺から多量の土器器甕や坏が出土している。遺物の出土状況からは、最終的な使用は北カマドであったと考えられる。

**東カマド** 東壁中央やや東寄りに位置する。燃焼部は壁面を掘り抜いて構築され、袖部は検出されていない。奥行きは1.53mで内1.03mは壁外へ張出す。幅は壁際で0.64mである。主軸方向はN-80°-Wを示す。燃焼部の南半は棚状施設によって切られている。カマド東西方向の土層断面では切られている様子は観察されず、カマド構築材と考えられる層(6層)や焼土ブロックを主体とする層(7・9層)が確認されている。遺存している内壁北面は比熱による焼土化が顕著で、著しく硬化している。燃焼部は床面からほぼ水平につながり、中央部でわずかに湾曲する。奥壁は丸みを持って煙道部へと続く。煙道部は燃焼部底面から段差なく延びている。燃焼部に接する部分は幅0.38mで、幅を狭めつつ350°で立ち上がる。焚き口前面の堆積土中から須恵器坏が出土している。

**北カマド** 北壁の東寄りに位置する。規模は、調査区外へ延びているため全容は不明である。焚き口付近は幅0.78mである。主軸方向はN-180°-Wを示す。燃焼部は床面より水平につながり、中央部でわずかに湾曲する。燃焼部は壁内から壁外にかけて構築されていたとみられる。袖部は不明瞭だが、東側では僅かに地山を掘り残した袖部が確認された。堆積土には焼土ブロックを主体とする層(9層)が確認されている。燃焼部内やカマド、その西側から土器器甕、須恵器坏が出土している。

**貯蔵穴** 貯蔵穴としての性格付けは不明瞭だが、南東隅に1基検出されている。長軸0.53m、短軸0.38



土層説明 (AA')

1. 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土ブロック (1~3mm)・炭化物 (3~5mm) をやや多く含む, 褐色土粒子をやや多く含む, 締り・粘性有
2. 7.5YR3/3 暗褐色土 褐色土粒子を多く含む, 炭化物 (1~2mm) を少量含む, 締り・粘性有
3. 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック (2~3mm) を少量含む, 褐色土粒子をやや多く含む, 小礫を少量含む, 締り・粘性有
4. 7.5YR3/2 黒褐色土 暗褐色土ブロック (3~10mm) を多量含む, 焼土ブロック (3~5mm)・炭化物 (2~3mm) を少量含む, 締り・粘性有
5. 7.5YR3/3 暗褐色土 炭化物 (3~5mm) を多く含む, 炭化物 (3~5mm) を少量含む, 褐色土粒子を少量含む, 締り・粘性有
6. 7.5YR3/2 黒褐色土 褐色土粒子を少量含む, 締りあり, 粘性強い (焼土, 炭化物を含まない, カマド構築材の流れ出しか?)
7. 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土ブロック (3~10mm)・炭化物 (3~5mm) を多く含む, 締り・粘性有
8. 10YR3/4 暗褐色土 小礫を少量含む, 締り・粘性有
9. 5YR4/8 赤褐色土 焼土ブロック (3~10mm)・粒子主体, 7.5YR3/2 黒褐色土粒子をやや多く含む, 締り・粘性有
10. 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土粒子を少量含む, 締り・粘性有
19. 7.5YR4/3 褐色土 焼土粒子を少量含む, 締り・粘性有

土層説明 (BB')

1. 7.5YR3/2 黒褐色土 褐色土粒子, 小礫, 焼土粒子を少量含む, 締り・粘性有
2. 7.5YR3/3 暗褐色土 褐色土粒子を少量含む, 締り・粘性有
3. 7.5YR3/2 暗褐色土 褐色土粒子を少量含む, 締り・粘性有
4. 7.5Y 4/3 褐色土 7.5YR3/3 暗褐色土粒子を多く含む, 締りあり, 粘性強い
5. 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土粒子, 炭化物 (2~3mm) をやや多く含む, 締り・粘性有
6. 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土粒子を多く含む, 締り・粘性有

土層説明 (CC')

1. 7.5YR3/2 黒褐色土 礫 (20~50mm) を多く含む, 締り・粘性有
2. 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土ブロック (1~3mm)・炭化物 (3~5mm) をやや多く含む,
3. 褐色土粒子をやや多く含む, 締り・粘性有
3. 10YR3/4 暗褐色土 小礫を少量含む, 締り・粘性有
4. 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土ブロック (3~5mm)・小礫少量含む, 締り・粘性有
5. 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土粒子・褐色ブロック (3~4mm) 少量含む, 締り・粘性有

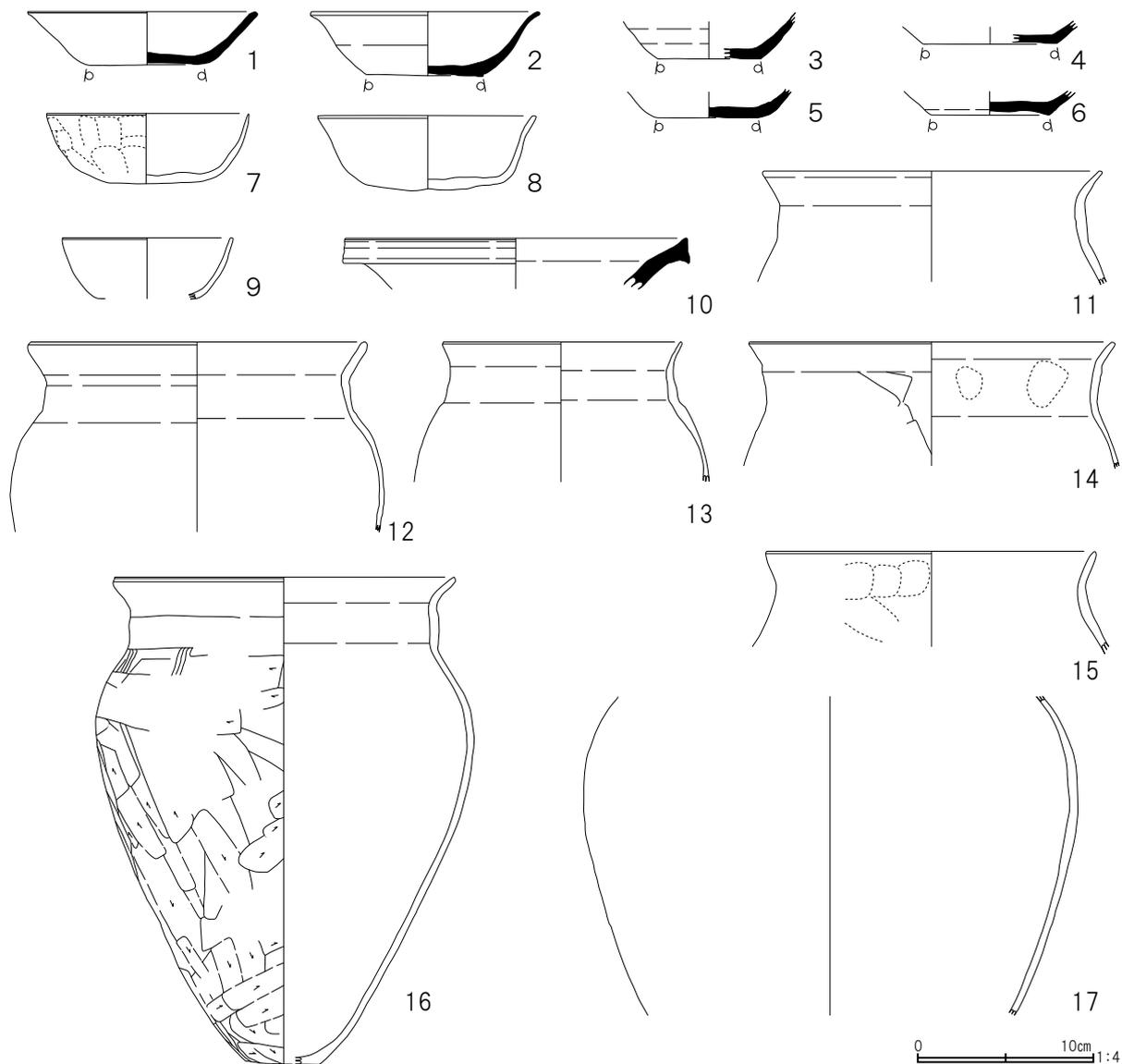
土層説明 (DD')

1. 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土粒子, 炭化物 (2~3mm) をやや多く含む, 締り・粘性有
2. 7.5YR3/3 暗褐色土 褐色土粒子を多く含む, 炭化物 (1~2mm) を少量含む, 締り・粘性有
3. 7.5Y 4/3 褐色土 7.5YR3/3 暗褐色土粒子を多く含む, 締りあり, 粘性強い
4. 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土粒子を多く含む, 壁熱により赤みを帯びる, 締り・粘性有

土層説明 (FF')

1. 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土粒子, 炭化物 (1~2mm) を少量含む, 締り・粘性有

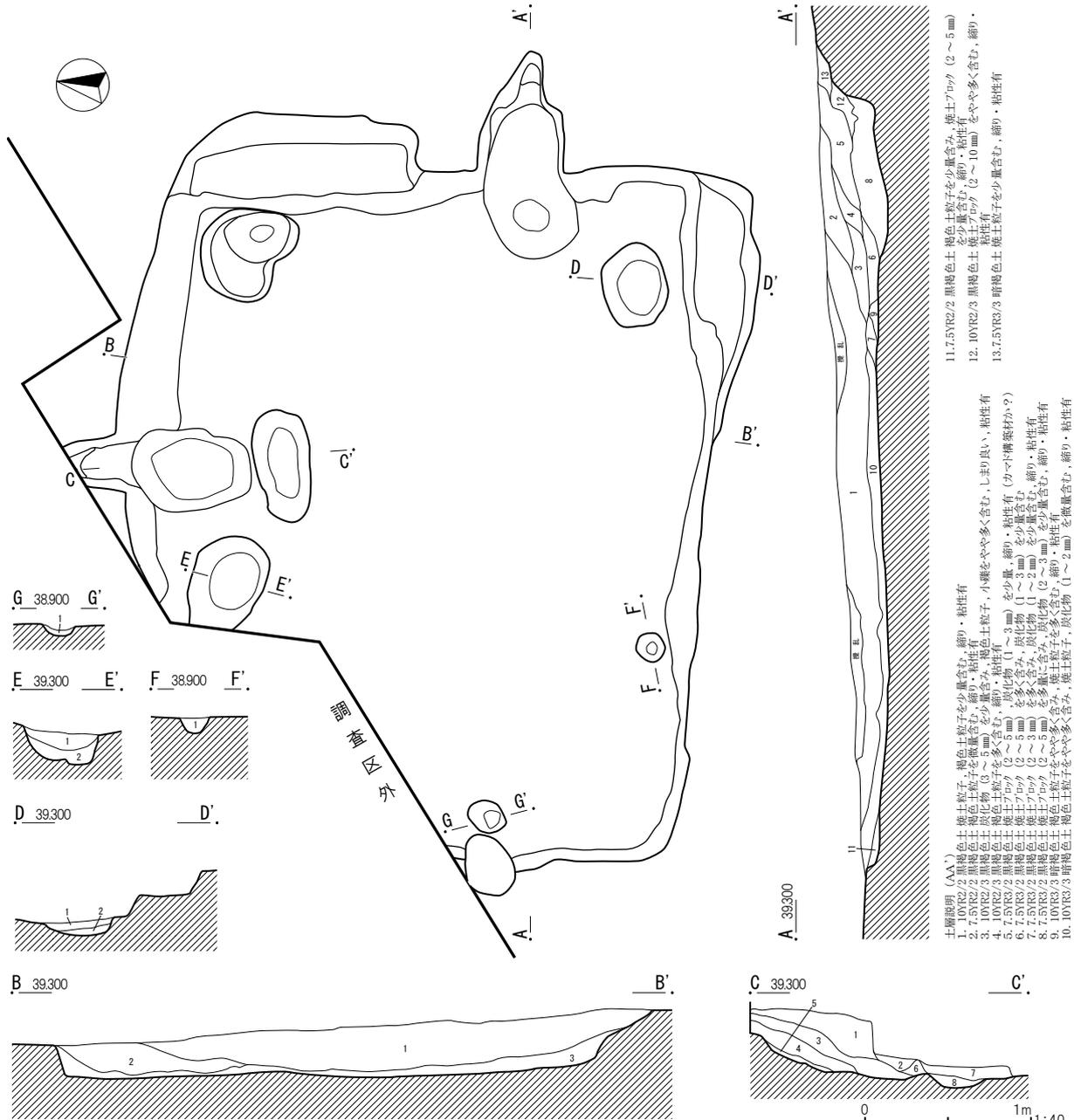
第6図 第1号住居跡



第7図 第1号住居跡出土遺物

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 坏	13.1	3.1	6.1	IN	灰白色	普通	80%	底部回転糸切り 末野産
2	須恵器 坏	13.1	3.6	6.7	ABGIKN	黄灰色	良好	90%	底部回転糸切り 末野産
3	須恵器 坏	-	(2.7)	(5.8)	IN	灰色	良好	体～底部片	底部回転糸切り 末野産
4	須恵器 坏	-	(1.3)	(7.8)	IFJK	暗灰黄色	良好	底部片	底部回転糸切り 末野産
5	須恵器 坏	-	(1.7)	(5.8)	AN	灰色	良好	底部片	底部回転糸切り 末野産
6	須恵器 坏	-	(1.4)	(7.1)	AIN	にぶい黄褐色	良好	底部片	底部回転糸切り 末野産
7	土師器 坏	11.6	4.0	6.5	BEL	にぶい橙色	良好	90%	底部損耗
8	土師器 坏	12.5	4.2	8.7	ABEN	明赤褐色	良好	90%	
9	土師器 坏	(9.8)	(3.5)	-	EJN	橙色	良好	10%	
10	須恵器 甕	(19.9)	(2.9)	-	ABN	黄灰色	良好	口縁部片	外面に自然釉
11	土師器 甕	(19.4)	(6.5)	-	AEIKN	明赤褐色	良好	口縁部片	横位のナデ
12	土師器 甕	(19.4)	(10.8)	-	CHKIN	橙色	普通	口縁～胴部片	横位のナデ
13	土師器 甕	(13.3)	(8.0)	-	CGIKN	にぶい褐色	良好	口縁～胴部片	胴部上半に斜位のナデ
14	土師器 甕	(21.0)	(7.3)	-	BKN	橙色	良好	口縁～胴部片	
15	土師器 甕	(18.8)	(5.9)	-	ABIJN	明赤褐色	普通	口縁部片	内外面磨耗
16	土師器 甕	19.2	28.1	4.3	ABCGHKM	薄赤褐色	良好	90%	胴部上半に横位のナデ、中～下半に縦・斜位のナデ
17	土師器 甕	(28.2)	(18.3)	-	ABCH	暗橙褐色	普通	胴部片	縦・斜位のナデ



土層説明 (BB')

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒子、褐色土粒子を少量含む、締り・粘性有
2. 7.5YR2/2 黒褐色土 褐色土粒子を微量含む、締り・粘性有
3. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土粒子をやや多く含む、焼土粒子、炭化物 (1~2mm) を微量含む、締り・粘性有

土層説明 (CC')

1. 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土ブロック (3~10mm)・褐色土粒子を少量含む、締り・粘性有
2. 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック (3~10mm) を多く含む、褐色土粒子を少量含む、締り・粘性有
3. 7.5YR4/3 褐色土 炭化物 (2~3mm)・焼土粒子を少量含む、締り・粘性有
4. 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土ブロック (3~15mm)・炭化物 (2~3mm) を多く含む、締り・粘性有
5. 7.5YR3/3 暗褐色土 (シルト質) 焼土ブロック (2~3mm)・炭化物 (1~2mm) 少量含む、締り有、粘性強い
6. 7.5YR3/3 暗褐色土 締り・粘性有
7. 10YR3/2 黒褐色土 焼土ブロック (3~5mm)・炭化物 (2~3mm) をやや多く含む、締り・粘性有
8. 7.5YR4/3 褐色土 炭化物 (2~3mm) を少量含む、締り・粘性有

土層説明 (DD')

1. 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土粒子を少量含む、締り・粘性有
2. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土粒子をやや多く含む、締り・粘性有

土層説明 (FF')

1. 7.5YR3/3 暗褐色土 10YR4/3 褐色土ブロック (3~5mm)・粒子を多く含む、締り・粘性有

土層説明 (GG')

1. 7.5YR3/3 暗褐色土 10YR4/3 褐色土ブロック (3~5mm)・粒子を多く含む、締り・粘性有

土層説明 (EE')

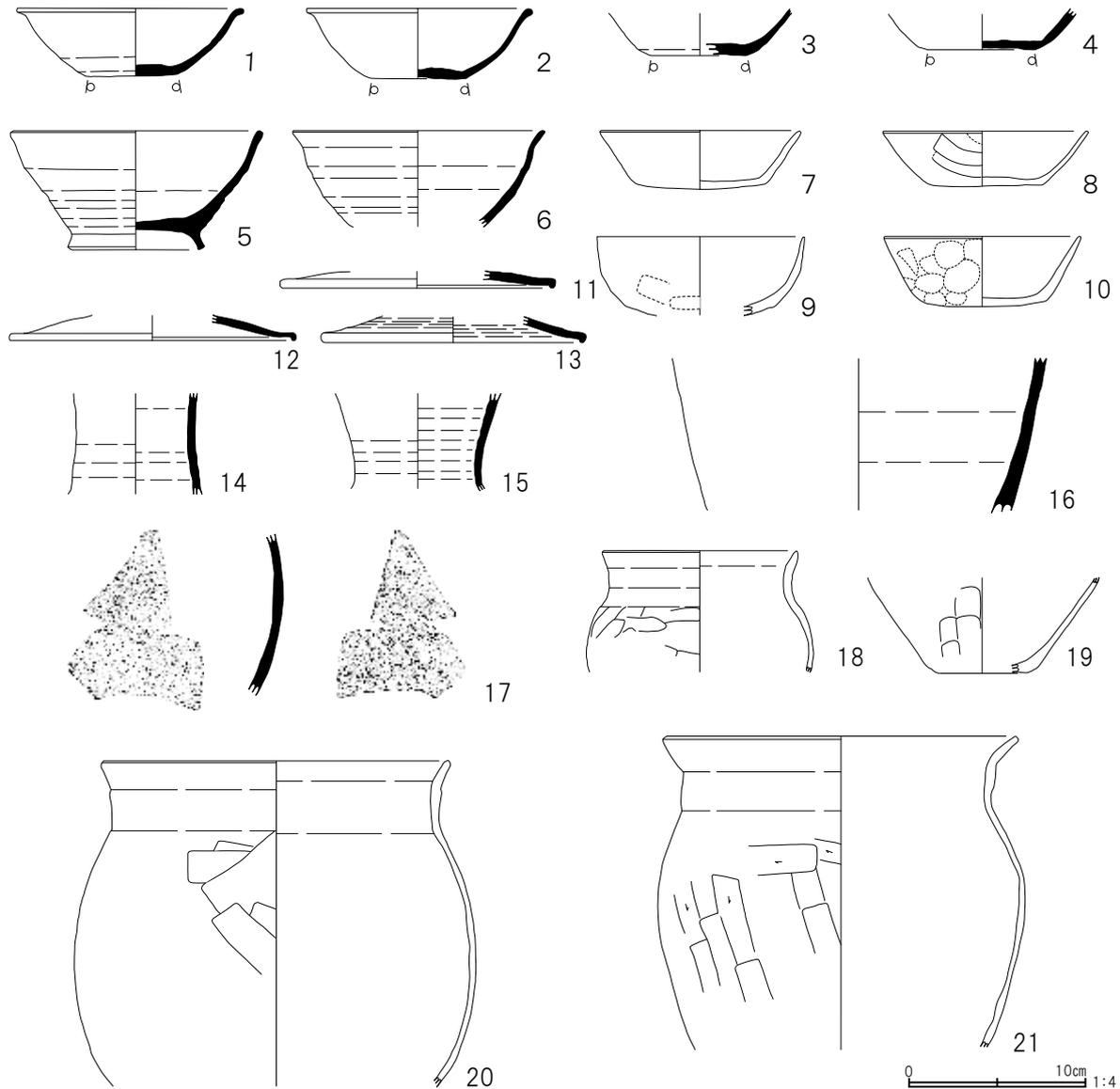
1. 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック (2~3mm)・炭化物 (2~3mm) を多く含む、締り・粘性有
2. 7.5YR3/2 黒褐色土 炭化粒子多く含む、焼土ブロック (2~3mm)・炭化物 (2~3mm) 少量含む、締り・粘性有 \*上面に貼床、硬化は認められない。

第 8 図 第 2 号住居跡

mの楕円形で深さ 0.19 mを測る。

**出土遺物** 遺物は北カマド内やその周辺で比較的多く、土師器杯、須恵器が出土している。須恵器杯 6 点、土師器杯 3 点、須恵器甕 1 点、土師器甕 7 点を図示した。東カマド内からは須恵器杯、その南の棚状施設から土師器甕が検出された他、土師器甕、須恵器杯が床面直上から出土している。

**時期** 出土遺物から 9 世紀後半と考えられる。



第9図 第2号住居跡出土遺物

第2号住居跡（第8図、第9図、第3表）

**位置** C-2グリッドに位置する。

**重複** 西壁でP20と重複する。P20は本遺構の堆積土を切って掘り込まれている様子が確認されている。

**形状・規模** 東西軸4.25m、南北軸3.63mで東西軸がやや長い長方形である。深さは最深部で0.44mである。主軸方向は南辺での計測でN-88°-E、東辺での計測でN-80°-Wを示す。カマドは北壁と東壁から計2基が検出され、建て替えが行われた可能性があるが、床面の高低差や堆積土の観察によってもその新旧関係を捉えることはできなかった。

**床面** 床面はやや起伏があり北東から南西へ下り傾斜となり、高低差は8cmほどである。地山を床としており、掘り方は認められなかった。

**棚状施設** 東壁北寄りと南壁東寄りに棚状施設が付設されている。東壁側は東カマド以北に付設され長さ1.44m、奥行0.48m、床面からの高さは14cm、南壁側は長さ1.25m、奥行0.39m、床面からの高さは14cmである。

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 坏	13.0	4.0	5.3	ABCGHKM	明灰黄褐色	普通	70%	底部回転糸切り 末野産
2	須恵器 坏	12.8	4.0	5.3	AGHIKN	にぶい黄橙色	普通	80%	底部回転糸切り 末野産
3	須恵器 坏	-	(2.65)	(5.5)	AN	灰色	良好		体～底部片 底部回転糸切り 末野産
4	須恵器 坏	-	(2.5)	(6.3)	AN	黄灰色	良好		体～底部片 底部回転糸切り 末野産
5	須恵器 埴	(14.4)	6.8	7.8	ABM	暗灰褐色	良好	70%	高台付 底部回転糸切り 末野産
6	須恵器 埴	(14.4)	(5.5)	-	AGIN	灰オリーブ色	良好	20%	底部欠損 末野産
7	土師器 坏	(11.5)	3.4	7.4	ACM	明黄橙褐色	不良	60%	内外面磨耗
8	土師器 坏	(11.7)	3.1	6.7	ACN	橙色	良好	50%	
9	土師器 坏	(11.8)	(4.5)	-	IJ	にぶい黄橙色	普通	20%	内外面磨耗
10	土師器 坏	(11.2)	4.0	(7.0)	ABEN	橙色	普通	60%	外面
11	須恵器 蓋	(15.7)	(1.0)	-	AIN	にぶい黄色	不良	10%	末野産
12	須恵器 蓋	(16.2)	(1.5)	-	AGIN	灰黄色	良好	20%	末野産
13	須恵器 蓋	(15.0)	(1.5)	-	AIKN	黄灰色	良好	10%	末野産
14	須恵器 長頸瓶	-	(5.7)	-	BN	暗灰黄色	良好		頸部片 外面に自然釉
15	須恵器 長頸瓶	-	(5.1)	-	BIN	黄褐色	良好		頸部片
16	須恵器 瓶?	-	(9.0)	-	GIKN	黄灰色	良好		体部片 外面に自然釉 斜位のナデ
17	須恵器 甕	-	-	-	BIKN	灰色	良好		胴部片 外面に自然釉 末野産
18	土師器 甕	11.2	(7.0)	-	ADIKN	明赤褐色	普通		口縁～胴部片 胴部上半横位のナデ、以下縦位のナデ
19	土師器 甕	-	(5.5)	(4.9)	ABIKN	にぶい橙色	普通		底部片 縦位のナデ
20	土師器 甕	(19.6)	(18.2)	-	BIJN	にぶい黄橙色	普通		口縁～胴部片 胴部上半横位のナデ、以下縦位のナデ
21	土師器 甕	(20.2)	(17.9)	-	ABDGIKN	明赤褐色	良好		口縁～胴部片 胴部上半横位のナデ、以下縦位のナデ

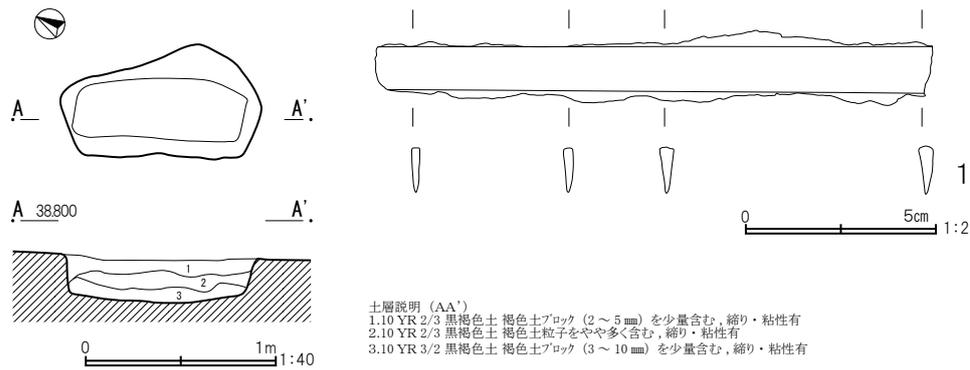
**堆積土** 粘性が強く締まりのある黒褐色土が主体であり、レンズ状堆積であることから、自然堆積と考えられる。

**カマド** 2基のカマドは、北壁東寄りと東壁中央に付設されている。東壁のカマドは壁面を掘り込んで燃焼部が造られ、内壁が著しく焼土化している。北壁のカマドは遺存状態が不良で、被熱による焼土化も認められない。これらの状況からは、最終的に使用されていたのは東カマドであると考えられる。

**東カマド** 東壁中央に位置する。燃焼部は壁面を掘り抜いて構築され、構築材は遺存していない。奥行1.26 mで内0.73 mは壁外へ張出す。壁際で幅0.60 mを測る。主軸方向はN-86°-Eを示す。燃焼部前面は浅く落込み、緩い傾斜で燃焼部内へ昇る。奥壁は丸みを持ちほぼ90°で立ち上がる。煙道部は燃焼部から0.18 mほど高くなり、燃焼部に接する部分では幅0.24 mを測り、狭まりながら、緩い傾斜で立ち上がり、0.28 mの長さが確認された。底部火床面は検出されていない。側壁から煙道部では焼土化が顕著にみられ、内壁北面が最も顕著である。

**北カマド** 北壁ほぼ中央に位置する。規模は煙道先端が調査区外とさらに延びているため全容は不明である。焚き口付近で幅0.59 mである。主軸方向はN-70°-Wを示す。構築材とみられる焼土を含む暗褐色土の堆積がみられ、遺物はこの土層中から出土している。壁際の床面には長軸0.75 m、短軸0.50 m、深さ0.05 mの楕円形の落ち込みがあり、火床面は検出されなかったがこの部分が燃焼部であったと考えられる。燃焼部は屋内にあったと思われるが、住居が拡張されている可能性があり断定できない。さらに、その前面には長軸0.67 m、短軸0.33 m、床面からの深さは0.12 mの長楕円形の落ち込みがある。遺物は多く検出された。煙道部は燃焼部から連続して壁外に延びる。幅0.36 mで、底面は緩い上がり傾斜となって調査区外に延びている。

**貯蔵穴** 貯蔵穴としての性格付けは不明瞭だが、南東隅に1基、北東隅に1基、北カマド西寄りに1基の計3基の掘り込みが検出されている。南東のものは長軸0.53 m、短軸0.38 mの楕円形で深さ0.16 m、北東のものは長軸0.61 m、短軸0.48 mの楕円形で、深さ0.14 m、北カマド西寄りのものは長軸0.58



第10図 第1号土坑・出土遺物

m以上、短軸0.43m、床面からの深さは0.19mである。

**ピット** 2基検出されているが本遺構に伴うかは不明である。P1は南壁際やや東寄り、P2は西壁際の南より検出されている。規模は、P1は長軸0.18m、短軸0.16mの楕円形で床面からの深さは0.10m、P2は長軸0.24m、短軸0.18m、床面からの深さは0.07mである。

**掘り方** 床面はV層を直接床としているが、東カマド前面と、その北方に接した位置の上面に張り床が施された掘り込みが検出されている。

**出土遺物** 須恵器坏4点、須恵器埴2点、土師器坏4点、須恵器蓋3点、須恵器瓶3点、須恵器甕1点、土師器甕4点を図示した。東寄りの堆積土中からの出土が比較的多い。東カマド内から土師器甕、北カマド前面の掘り込みから土師器坏、南寄りから須恵器坏が出土している。

**時期** 出土遺物から9世紀後半と考えられる。

## (2) その他の遺構

### 第1号土坑 (第10図)

**位置** C-3・4グリッドに位置する。

**規模・形状** 長軸1.07m、短軸0.46m、深さは0.26mを測る。形状は、上面ではやや不整形であるが、底面は整った長方形を呈する。底面の規模は長軸0.90m、短軸0.32mである。主軸方向はN-28°-Eである。断面形状は底面が平坦な箱形である。堆積土3層に分層され、暗褐色土ブロックを含む黒褐色土がほぼ水平に堆積がみられ、人為的なものと推測される。

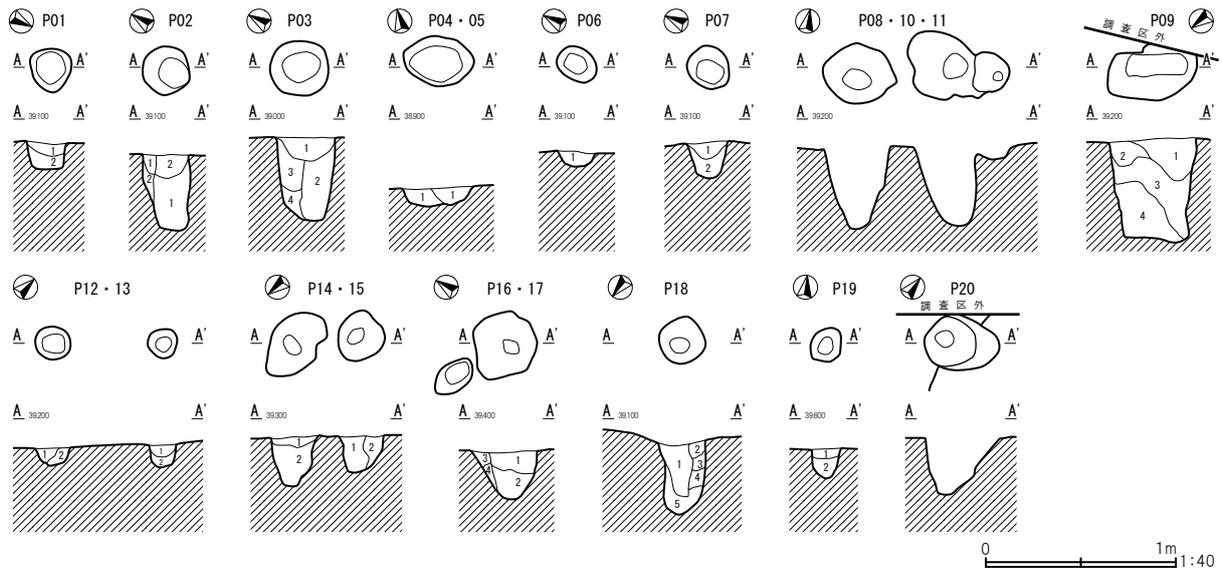
**出土遺物** 西壁際北寄りの底面から刀子が1点出土している。壁面に沿って置かれたように出土し、埋納されたものと考えられる。

**時期** 刀子が出土していることから、古代と考えられる。

**所見** 掘り方形状や堆積土の状況と併せ刀子の出土から、人骨は検出されなかったが、小型の土坑墓の可能性はある。

### ピット (第11図、第4表)

ピットは20基検出し、調査区の北東端にまとまって認められた。さらに調査区東側に広がると考えられるが、調査範囲では建物跡などの想定される規則性を見出すことはできなかった。規模等各ピットの詳細は一覧表にまとめた。



P01 土層説明 (AA')  
 1.10YR2/3 黒褐色土 焼土粒子を少量含む, 締り・粘性有  
 2.10YR2/3 黒褐色土 10YR3/2 黒褐色土ブロック (3~5mm) を多く含む, 締り・粘性有

P02 土層説明 (AA')  
 1.7.5YR3/2 黒褐色土 7.5YR4/4 褐色土ブロック (3~5mm) を少量含む, 締り・粘性有  
 2.10YR2/3 黒褐色土 10YR3/2 黒褐色土ブロック (3~5mm) を多く含む, 締り・粘性有

P03 土層説明 (AA')  
 1.10YR3/2 黒褐色土 7.5YR4/4 褐色土ブロック (3~5mm) を少量含む, 締り・粘性有  
 2.10YR2/3 黒褐色土 褐色土粒子を多く含む, 締り・粘性有  
 3.10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック (3~5mm) を少量含む, 締り・粘性有  
 4.10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック (3~5mm) をやや多く含む, 締り・粘性有

P04-05 土層説明 (AA')  
 P04  
 1.10YR2/3 黒褐色土 7.5YR3/2 黒褐色土粒子をやや多く含む, 締り・粘性有  
 P05  
 1.10YR2/3 黒褐色土 7.5YR3/2 黒褐色土ブロック (3~5mm) を多く含む, 締り・粘性有

P06 土層説明 (AA')  
 1.10YR2/3 黒褐色土 褐色土粒子を少量含む

P07 土層説明 (AA')  
 1.10YR3/2 黒褐色土 褐色土・シルト粒子を少量含む, 締り・粘性有  
 2.10YR3/2 黒褐色土 褐色土・シルト粒子をやや多く含む, 締り・粘性有

P09 土層説明 (AA')  
 1.10YR2/3 黒褐色土 褐色土粒子を少量含む, 締り・粘性有  
 2.10YR2/2 黒褐色土 褐色土ブロック (3~10mm) ・粒子をやや多く含む, 締り・粘性有  
 3.10YR2/2 黒褐色土 10YR4/4 褐色土ブロック (3~10mm) ・粒子を多量に含む, 締り・粘性有  
 4.10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック主体, 黒褐色土粒子をやや多く含む, 締り・粘性有

P12-13 土層説明 (AA')  
 P12  
 1.10YR2/3 黒褐色土 褐色土粒子を少量含む, 締り・粘性有  
 2.7.5YR3/2 黒褐色土 褐色土粒子を多く含む, 締り・粘性有  
 P13  
 1.7.5YR2/3 黒褐色土 褐色土粒子をやや多く含む, 締り・粘性有

P14-15 土層説明 (AA')  
 P14  
 1.7.5YR3/2 褐色土粒子を多く含む, 締り・粘性有  
 2.7.5YR3/2 褐色土粒子をやや多く含む, 締り・粘性有  
 P15  
 1.7.5YR3/2 黒褐色土  
 2.7.5YR2/3 黒褐色土

P16-17 土層説明 (AA')  
 P16  
 1.7.5YR3/2 黒褐色土 7.5YR4/4 褐色土ブロック (2~3mm) ・粒子を多く含む, 締り・粘性有  
 P17  
 1.7.5YR3/2 黒褐色土 褐色土粒子をやや多く含む, 締り・粘性有  
 2.7.5YR3/2 黒褐色土 褐色土粒子を少量含む, 締り・粘性有  
 3.7.5YR3/3 暗褐色土 褐色土粒子を多量に含む, 締り・粘性有  
 4.7.5YR3/2 黒褐色土 褐色土粒子を多く含む, 締り・粘性有

P18 土層説明 (AA')  
 1.7.5YR3/2 黒褐色土 7.5YR4/4 褐色土ブロック (3~5mm) ・粒子を少量含む, 締り・粘性有  
 2.7.5YR3/2 黒褐色土 褐色土ブロック (2~5mm) ・粒子を多く含む, 締り・粘性有  
 3.7.5YR3/2 黒褐色土 褐色土ブロック (2~3mm) ・粒子を多く含む, 締り・粘性有  
 4.7.5YR4/4 褐色土 黒褐色土粒子をやや多く含む, 締り・粘性有  
 5.7.5YR3/2 黒褐色土 褐色土ブロック (3~5mm) ・粒子をやや多く含む, 締り・粘性有

P19 土層説明 (AA')  
 1.10YR3/3 暗褐色土 炭化物 (1~2mm), 焼土粒子, 褐色土粒子を少量含む, 締り・粘性有  
 2.10YR3/3 暗褐色土 褐色土粒子を少量含む, 締り・粘性有

第11図 ピット (P01~20)

第4表 ピット計測表

番号	グリッド	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
P01	C-3	円形	0.22	0.21	0.15	
P02	D-3	円形	0.26	0.25	0.41	土層観察で柱痕が確認されている。
P03	D-4	楕円形	0.31	0.29	0.45	土層観察で柱痕が確認されている。
P04	C-4	楕円形	0.25	0.20	0.09	P05より新しい。
P05	C-4	不明	0.25	-	0.11	P04より古い。
P06	C-3	楕円形	0.23	0.17	0.09	
P07	C-3	楕円形	0.24	0.21	0.20	
P08	D-3	隅丸方形	0.33	0.32	0.32	土層観察で柱痕が確認されている。
P09	D-3	長方形	0.45	0.33	0.56	上面は不整形だが、底面は整った形状。
P10	D-3	不整楕円形	0.48	0.34	0.41	
P11	D-3	不明	0.20	(0.18)	0.14	
P12	D-3	楕円形	0.28	0.18	0.10	
P13	D-3	円形	0.17	0.16	0.15	
P14	D-3	不整楕円形	0.28	0.25	0.26	底面の形状は方形。
P15	D-3	楕円形	0.41	0.27	0.20	
P16	D-3	隅丸方形	0.34	0.34	0.27	
P17	D-3	長方形	0.25	0.15	0.13	底面は西が浅く、東が深い。
P18	D-3	楕円形	0.34	0.24	0.38	土層観察で柱痕が確認されている。
P19	C-2	楕円形	0.18	0.14	0.16	
P20	C-2	楕円形	0.49	0.39	0.14	SI02と重複し、本ピットが新しい。

## 4 調査のまとめ

本遺跡は縄文時代中期から古墳時代、奈良・平安時代と続く遺跡である。現状はまばらに集落が点在し、主に畑地としての利用がなされ、山林が残っている。開発の少ない地域であるため、遺跡保存状況は良好である。しかし、逆説的になるが集落跡としての概要は不明な点が多い。

古墳時代をみると、集落跡としては瀬戸山古墳群と密接な関係にあるのは間違いない。瀬戸山古墳群は6世紀末から7世紀末～8世紀初頭段階までに築造された群集墳である。現在のところ33基確認されており、その分布は、北西部及び南東部に偏りがみられる。今回調査地点の集落は北西－南東方向に広がる遺跡範囲のほぼ中間点である。時期的にみて直接的に古墳群の成立を担った人々に関するものではなかった。ここでは、調査成果を踏まえ、遺跡の状況を整理し調査のまとめとする。

今回の調査において、住居跡を2軒検出した。両者ともカマドが2基確認され、東側と北側と方位も一致する。住居の拡張とカマドの付け替えを行ったもの観察され、同時期に存在し、同様に改築を行った可能性が考えられる。出土遺物からは9世紀後半ごろと考えられ、2軒の住居跡に際立った時期差はみられない。床面は礫が混じる地山であり、比較的安定した地盤を選んで占地したことが窺える。

調査地点の環境をみると、江南台地東端の北側崖線付近であり、森林が広がり崖線直下には和田吉野川が東流する。崖線下は田園が広がり、耕作に向けた土地柄である。また、南側には隣接して湧水による池が現存する。これらの状況を踏まえると、生活用水の確保が容易であり、森林資源の入手が可能であり、農業用水も確保された生産活動及び住環境に適した土地であり、荒川筋の水運も期待でき、利便性は極めて高い。

上記を背景とし、この地を生活基盤とした集団が成長して行ったと考えられる。集落は古墳時代前期より本遺跡北西部及び南東部で確認されている。そして、中期・後期の不明な時期を跨いで奈良・平安時代の集落が今回確認されたことになり、未調査・空白エリアともいべき遺跡中央部での遺構・遺物の検出は成果といえる。古墳群の成立及び集落の変遷を明らかにするには未だ情報が少ないといわざるを得ない状況だが、新たな成果により地域の歴史解明が一步前進したことは間違いない。

今回の調査では、以上のような状況が確認された。今後は、古墳の造営に直接関する時期の集落を確認することは当然であるが、集落域と墓域のエリア別の土地利用や、本遺跡南方に数多く点在する古墳群との関係性など、課題とする検討すべき事項あり、それらの解明が必要となってくる。また、遺物採取でのみ確認している縄文時代の様相も課題として残っている。さらなる成果の集積を待って、遺跡の詳細が明らかになることを期待したい。



### Ⅲ 山ヶ谷戸遺跡

# 1 遺跡の立地と環境

熊谷市の環境については割愛する。

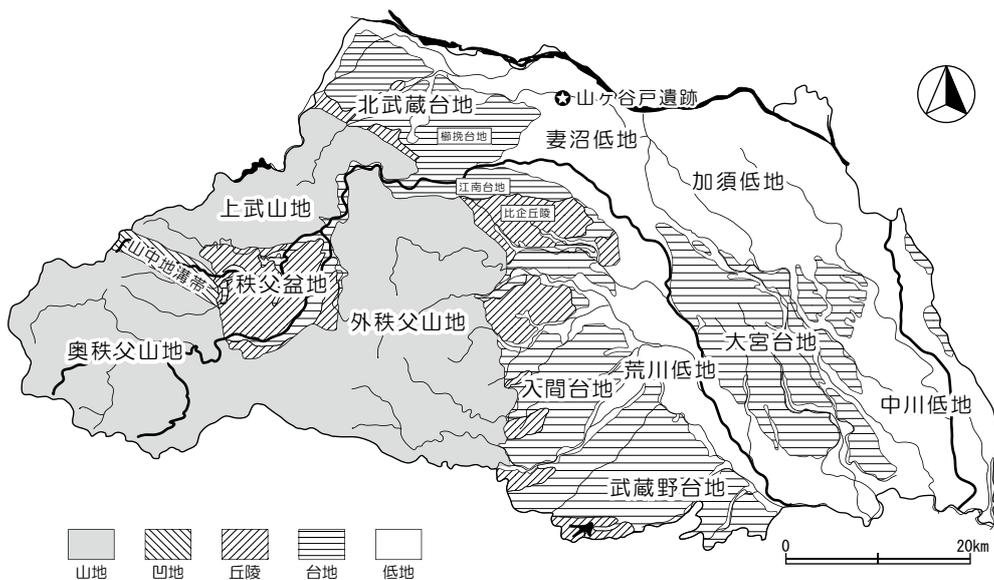
今回報告する山ヶ谷戸遺跡(1)は熊谷市北部の上根地区に所在し、山ヶ谷戸遺跡は旧妻沼町域に含まれるが、地形的にみれば河川によって3つの区分ができる。北側より利根川と芝川に挟まれた北部微高地、芝川と福川の間の中部微高地、福川と奈良川の間南部微高地である。本遺跡は南側の微高地に位置し、福川に沿って堆積した自然堤防と後輩湿地に立地する。この自然堤防は標高約28mを測り後背湿地は1.3mの高まりである。現在は土地改良事業等により、福川や耕作地は原地形を失っている。次に山ヶ谷戸遺跡周辺の歴史的環境について概観する。

旧石器時代から縄文時代早期までは現在のところ遺跡は確認されていない。

縄文時代前期になると僅かながら遺物が散見される。西城切通遺跡より関山式、諸磯式土器の破片が確認されている。

中期になると、確認された遺跡は微増する。鶉森遺跡や道ヶ谷戸条里遺跡で加曾利E式土器が検出されているが、妻沼低地における該期の痕跡は低調であり、台地およびその周辺が中心と言える。

縄文時代後期に入ると遺跡数は増加する。上葛和田遺跡(2)では堀之内式や加曾利B式土器が検出され、上北浦遺跡(25)では堀之内式土器が出土している。場違ヶ谷戸遺跡(16)から採集された石器は妻沼町誌で紹介されている。西側の楯引台地では三ヶ尻遺跡より、加曾利EⅢ式～安行1式にかかる土器が出土している。後期に台地集落は存在するものの、小規模であるとの検討がなされている。西城切通遺跡は、高井東式と安行1式を主体とした豊富な遺物量を誇り、妻沼低地における縄文時代後期後半の主要な遺跡と言える。熊谷市域東部に所在する諏訪木遺跡より、本遺跡と同時期の遺構・遺物が確認されており、その関連性については興味を引くところである。本遺跡の近接域に限って言えば、縄文時代後期からの遺跡数の増加は、低地上の自然堤防への進出が活生化する傾向と捉えられるが、旧妻沼町域の中部微高地にまで広がるものの、南側の微高地に偏りをみせることから、低地全域への展開には至ら



第12図 埼玉県の地形図(山ヶ谷戸遺跡位置図)

ないと考えられる。

縄文時代晩期になると遺跡数は減少する。諏訪木遺跡で後期より継続して集落が営まれているが、上江袋地区で石器が採集されているほかは、妻沼低地での活動の痕跡は希薄なまま弥生時代を迎えることになるが、不明な点が多く今後の成果が期待される。

弥生時代の初期段階の遺跡としては横間栗遺跡、飯塚遺跡、飯塚北遺跡、飯塚南遺跡等が挙げられ、再葬墓の検出が目立つ傾向にある。また、出土した遺物は重要な遺物が多く、横間栗遺跡の再葬墓一括資料は埼玉県指定の文化財となり、飯塚遺跡出土の遺物も新編埼玉県史に記載されている。妻沼低地では飯塚地域に痕跡が多く見られることが特長であろう。周辺地域で特筆すべきは、深谷市の上敷免遺跡より遠賀川式土器の破片が検出されたことが挙げられる。

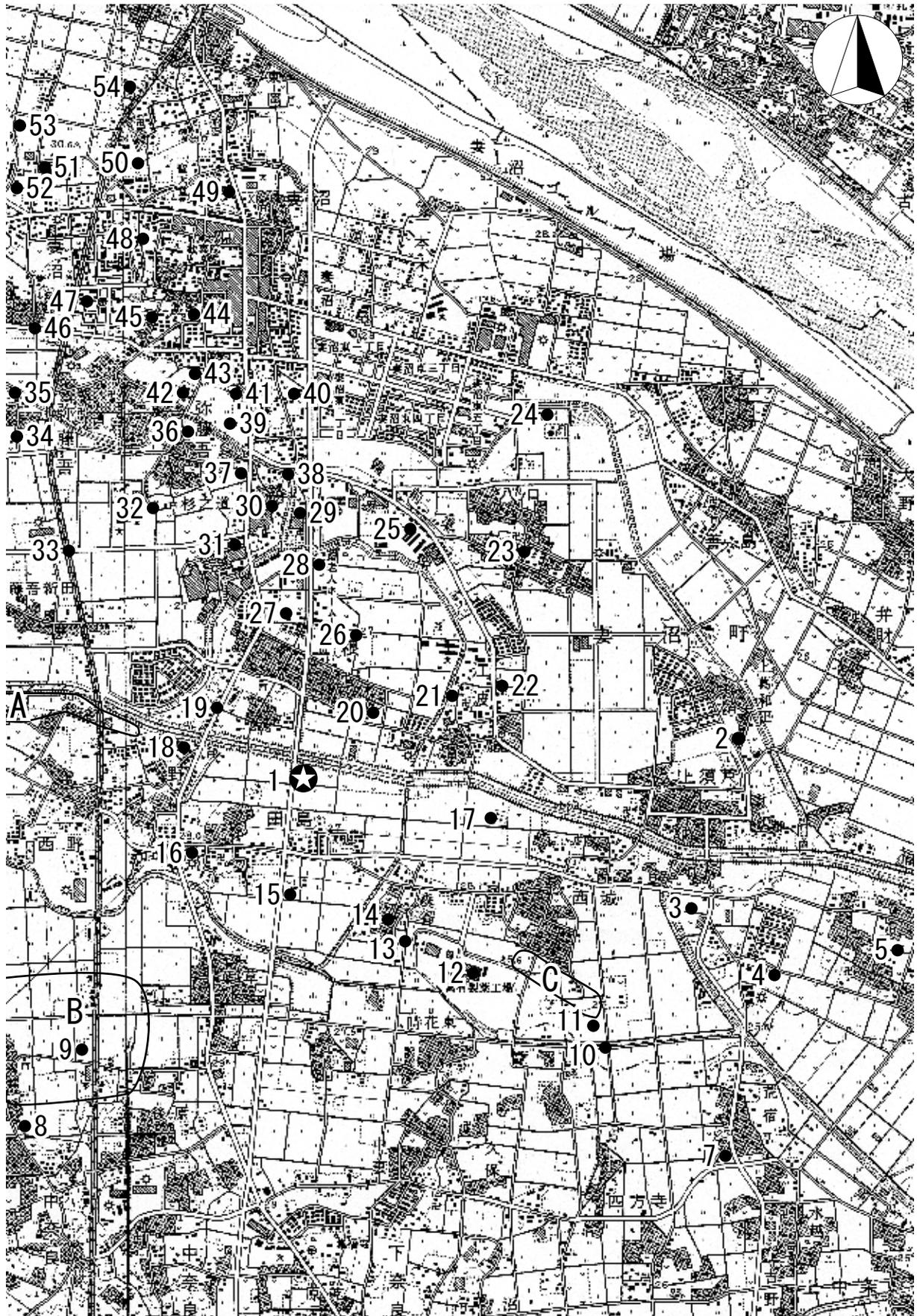
弥生時代中期中頃から、本遺跡周辺の地域で集落跡が目立つようになる。熊谷市東部の池上遺跡からは東日本でも最古段階と考えられる環濠集落が確認され、その墓域とされる行田市の小敷田遺跡からは方形周溝墓が検出されている。中期後半になると、妻沼低地の南側に当たる北島遺跡からは、大規模な集落跡と併せて墓域が確認され、水路や堰などの水利施設による水田経営の存在など、居住・墓域・生産がみられる重要な遺跡として注目を集めている。

後期になると、妻沼低地では弥藤吾新田遺跡(33)で当該期と考えられる破片が採取されている。この時期の情報は少ないことから不明な部分が多い。一方、周辺地域でも、北島遺跡や前中西遺跡で遺構が見られる外は、不明な点が多い。

古墳時代に入ると、妻沼低地への開発が活発化し遺跡の数が増加する。前期の遺跡として、大我井遺跡(49)、弥藤吾新田遺跡、鶴森遺跡(12)、上江袋古墳群(A)で集落跡を確認している。この時期は、群馬方面の石田川式土器との関係が考えられる甕が検出されている。中期は確認例が少ないため明らかでないが、後期になると遺跡の数はさらに増加する。確認されているだけで、八幡木遺跡、堀ノ内遺跡、道ヶ谷戸遺跡、一本杉遺跡(32)、飯塚南遺跡、鶴森遺跡等が挙げられ、自然堤防上の微高地に形成され、奈良・平安時代に継続する集落が見られるようになってくる。本遺跡についてもこうした流れの中で形成された集落であろうと推察される。一方で古墳については、5世紀末頃の奈良古墳群(B)の横塚山古墳、中条古墳群の鎧塚古墳、女塚1号墳、いずれも帆立貝式前方後円墳であるが、これらを周辺での緒源として、王子古墳(30)、摩多利神社古墳(51)、上江袋古墳群、飯塚古墳群、乙鶴森古墳群(C)が確認されている。墳丘を残すものは、横塚山古墳と摩多利神社古墳である。王子古墳については過去に墳丘調査がなされており、成果が妻沼町誌で紹介されている。

律令体制の始まる奈良・平安時代の本遺跡周辺一帯は武蔵国幡羅郡に属する。幡羅郡は上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡であり、熊谷市北・西部、深谷市東部等を含む一帯が該当すると考えられている。熊谷市との境に位置する深谷市幡羅遺跡からは郡衙の正倉と推定される大型建物群や道路跡などが確認されている。本市に所在する西別府廃寺、西別府祭祀遺跡、西別府遺跡は幡羅郡庁に関連する遺跡群であり、この地域一帯が当時の中心地であることが判明しつつある。

集落跡は前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多く、かつ規模の大きいものが多い。本遺跡周辺で挙げるならば、八幡木遺跡、鶴森遺跡、飯塚北遺跡、藤屋敷遺跡、中西原遺跡で痕跡が確認されている。集落跡以外で特色ある遺跡としては、条里遺跡が挙げられる。道ヶ谷戸条里遺跡、中条



第 13 图 周边遺跡分布图

第5表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	28	出口北遺跡	古墳後
2	上葛和田遺跡	縄文後	29	南王子遺跡	古墳後、奈良・平安
3	東城城跡	平安	30	王子古墳	古墳後
4	先載場遺跡	古墳後、奈良	31	王子西遺跡	古墳後
5	八幡間遺跡	古墳後、奈良	32	一本杉遺跡	古墳後、鎌倉、江戸
6	中条氏館跡	中世	33	弥藤吾新田遺跡	弥生後、古墳前、奈良・平安
7	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、中・近世	34	七の丸遺跡	古墳後、奈良
8	東通遺跡	古墳後	35	鎌ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
9	横塚遺跡	古墳前、平安	36	杉之道遺跡	古墳後、奈良・平安
10	長安寺遺跡	古墳後、奈良・平安	37	杉之道東遺跡	古墳後
11	西城城跡	平安	40	猿楽遺跡	古墳
12	鶴森遺跡	弥生中～後、古墳前～後、奈良・平安	41	下宿遺跡	古墳後
13	南大ヶ谷戸遺跡	奈良・平安	42	神明南遺跡	古墳後
14	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安	43	神明遺跡	古墳後、奈良
15	鷺ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良・平安	44	彦松東遺跡	古墳前、奈良・平安
16	場違ヶ谷戸遺跡	縄文後	45	彦松遺跡	古墳後、奈良・平安
17	西城切通遺跡	縄文後	46	年代遺跡	古墳後
18	実盛館	奈良・平安	47	彦松西遺跡	古墳後、奈良
19	高林遺跡	古墳後、奈良・平安	48	王子遺跡	古墳後
20	本郷遺跡	奈良	48	池ノ上遺跡	古墳後
21	西嬉愛遺跡	古墳後、奈良・平安	49	道祖神遺跡	古墳後
22	東嬉愛遺跡	奈良・平安	49	大我井遺跡	古墳前～後、奈良・平安
23	屋敷遺跡	古墳後	50	緑川遺跡	古墳後、奈良・平安
24	釜ノ上遺跡	奈良	51	摩多利神社古墳	古墳後
25	上北浦遺跡	縄文後	52	雉子尾遺跡	古墳後、奈良
26	出口南遺跡	古墳後	53	大明神遺跡	古墳
27	長井庵遺跡	古墳後	54	観音堂瓦窯跡	平安、鎌倉

古墳群

A	上江袋古墳群	古墳後	C	乙鶴森古墳群	古墳後
B	奈良古墳群	古墳中期後～末			

条里遺跡、別府条里遺跡など、現在も水田耕作される地域であるが、低地の後背湿地を利用した生産遺構が残されている。

平安時代末から中世にかけては武蔵七党やその他在地武士団の館跡がみられるようになる。実盛館(18)、西城城跡(11)、東城城跡(3)、中条氏館跡(6)、奈良氏館跡、別府氏館跡、別府城跡、西別府館跡等あるが、その実態は不明なものが多い。中条氏館跡と別府城跡では、現在も土塁と空堀が一部残っている。本遺跡近隣の遺跡としては、大我井遺跡内の4基の経塚が著名である。現在は東京国立博物館に収蔵され、妻沼経塚として公開・活用されており、最古の経筒に「久安」(1145～1151)の紀年銘がある。

中世段階になると、城館跡以外の遺跡に乏しい。その中で注目すべきは、有牀式平窯を持つ観音堂瓦窯跡(54)であるが、残念ながら供給先を含め不明な点が多い。また、国指定重要文化財である聖天堂、貴総門を有する歓喜院長楽寺は、治承三年(1179)に斎藤別当実盛による、白髪神社の改修・合祀を端緒として、建久八年(1197)に良応僧都により建立されたものである。以後、近隣の信仰を集めるとともに、周辺地域は門前町として栄え今日に至っている。



第14図 調査地点位置図

## 2 遺跡の概要

### (1) 調査の概要

発掘調査の方法は、1辺5mのグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、北西隅をA-1として南へA・B・C…、東へ1・2・3…とし、Aラインは東から西へA-1・A-2・A-3…と呼称した。Bライン以南もAラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。配置状況は第15図を参照のこと。

発掘調査は、重機により遺構確認面までの表土剥ぎを行った後、上記グリッドの設定を行った。なお座標は、世界測地系に基づく基準点測量による。グリッド設定後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。遺物は必要に応じて写真撮影・実測後、慎重に取り上げを行った。遺構も遺物同様必要に応じて写真撮影した後、実測を行った。そして最後に遺構全体の写真撮影を行い調査を終了した。

### (2) 検出された遺構と遺物

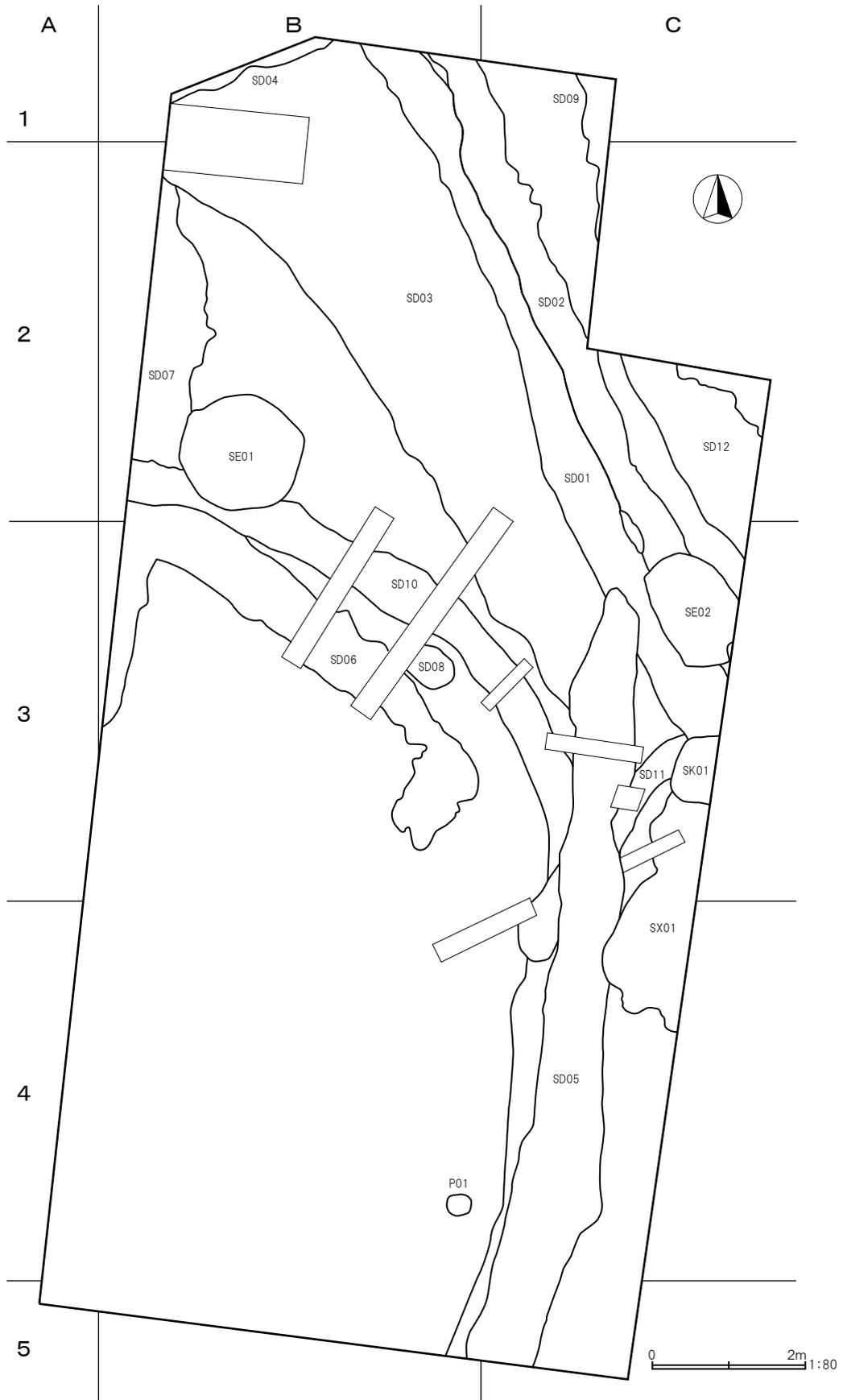
本調査によって検出された遺構は、溝跡12条、井戸跡2基、土壇1基、ピット1基、用途不明遺構1基である。

溝跡は、ほとんどのものが北西-南東方向に走行しているが、調査区内で屈曲して南に向かうものもある。いずれも、複数の溝が折り重なるように重複して並走している。詳細な時期を特定することは難しいが、この中で、規模が大きく断面形が箱薬研を呈するもの（第1号溝跡）は、堆積土下層に浅間A軽石が多量に含まれ、同軽石降下以降の埋没が想定される。他の溝では浅間B軽石を含むものと軽石を含まないものもあり、これらの溝は、さらに、時期はさかのぼると考えられる。

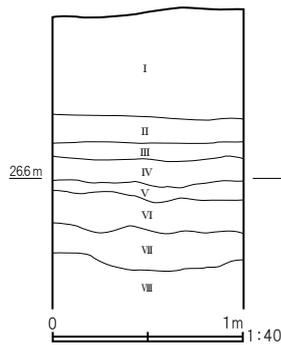
検出された井戸のうち、東壁際に検出された第2号井戸跡は、堆積土や他遺構との切り合いから、比較的古い時期が考えられるが、この井戸の西側を北端として、南北に走行する溝が1条あり、本井戸も溝の関連も考えられる。

遺物は微量であるが検出され、古墳時代の土師器や、江戸時代の瀬戸美濃系陶器がみられた。

本遺跡における今回の調査地点は、溝跡を中心に遺構が検出されたが、その形状や周辺の地形から、生業にかかるエリアであり、水田経営のための、福川を水源とする灌漑用水路と考えられ、修復や作り替えを繰り返しながら、古代から近年の土地改良が行われるまでの長い間、流路として機能していたことがうかがわれる。



第 15 図 全測図



基本層序土層説明

- I 10YR3/4 暗褐色土 盛土 白色軽石多く含む
- II 10YR4/2 灰黄褐色土 白色軽石少量含む→耕作土
- III 10YR3/4 暗褐色土 白色軽石やや多く含む, 酸化鉄粒子多く含む→耕作土
- IV 10YR3/3 暗褐色土 マンガン粒子多く含む
- V 10YR6/4 にぶい黄橙色土 マンガン粒子(1~2mm) 多量含む, 締り・粘性有
- VI 10YR5/4 にぶい黄褐色土 マンガン粒子(1~2mm) 多く含む, 締り・粘性有
- VII 10YR5/6 黄褐色土 マンガン粒子(1~2mm) 多量含む, 締り・粘性有
- VIII 7.5Y4/3 にぶい黄褐色土 マンガン粒子(1~2mm) 多く含む, 締り・粘性有

第 16 図 基本土層図

### 3 遺構と遺物

#### (1) 溝跡

##### 第 1 号溝跡 (第 17 図)

**位置** B-1・2、C-2・3 グリッドに位置する。

**重複** 第 2・5・11 号溝跡、第 1 号土壇と重複し、本遺構が最も新しい。第 2 号溝跡とは走行方向をほぼ同じくし、切り合って並走する。

**平面形・規模** 北北西-南南東走行で直線状に走行する。走行方向はN-27°-Wである。両端ともに調査区外へ延びる。検出長は 9.84 m、幅は調査できた範囲では 0.70 m であるが、調査区壁面での確認では上方は大きく開いている。確認面からの深さは 0.54 ~ 0.75 m である。底面レベルは多少の上下はあるものの、おおむね北北西から南南東へ向かって下り傾斜となっていて、北北西端と南南東端での高低差は 0.17 m である。水路と仮定した場合、北北西から南南西に向かって流水していたと考えられる。

**断面形** 上方は大きく開き、下方は逆台形である。

**堆積土** 灰黄褐色土が堆積する。下層の 5 層ではおもに浅間 A 軽石が堆積する層であり、これより上位の土層中には同軽石がまばらに混入している。

**出土遺物** 陶器破片が微量出土している。第 25 図へ 2 点図示した。

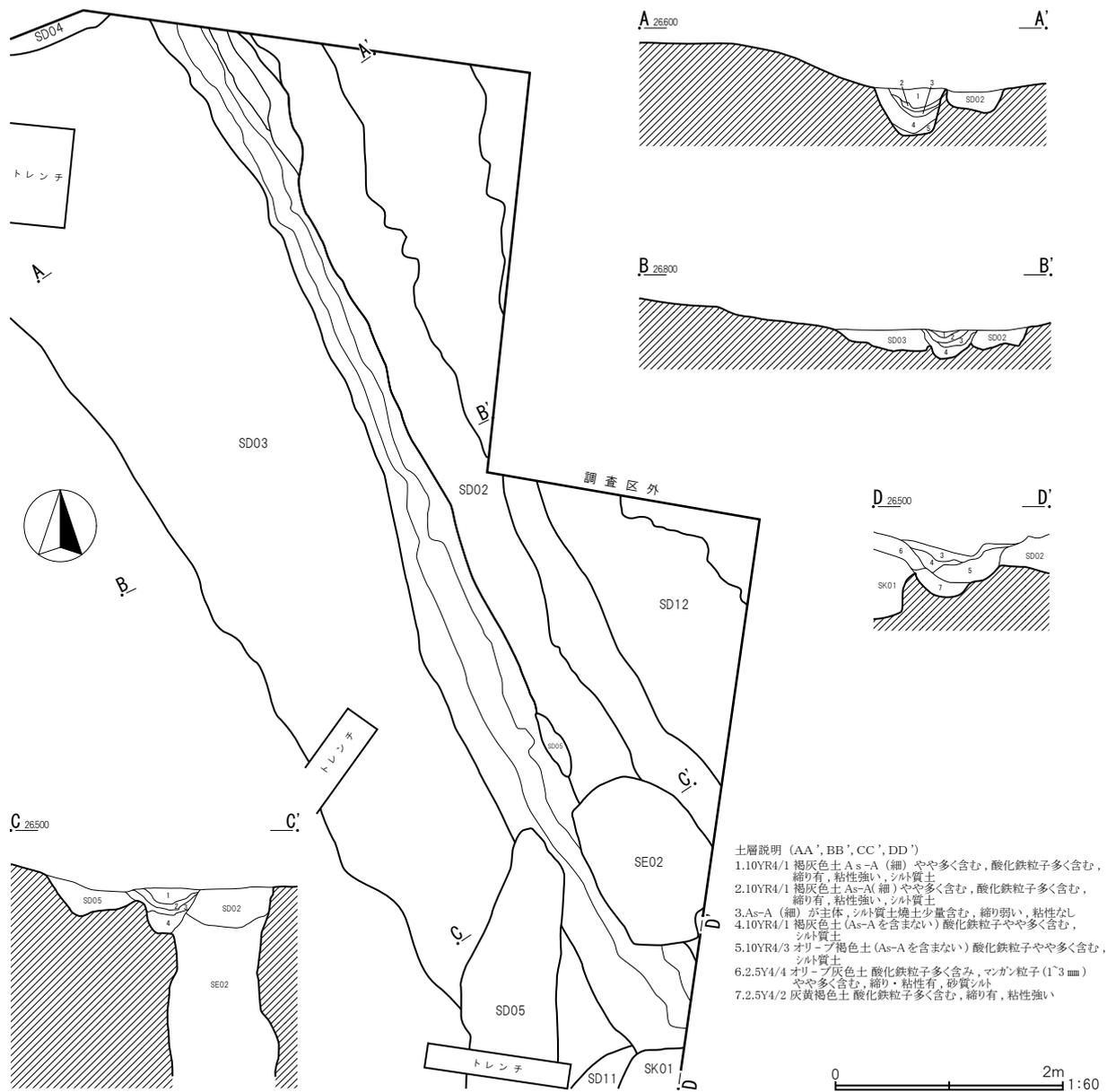
**時期** 浅間 A 軽石が混入することから、同軽石降下以降の埋没と考えられる。また、調査区壁面での土層観察では堆積土の上方には近年まで溝として機能していた痕跡が認められる。昭和の土地改良事業が行われるまでの間、改修を行いながら使用されていたと考えられる。

##### 第 2 号溝跡 (第 18 図)

**位置** B-1・2、C-1~3 グリッドに位置する。

**重複** 第 1 号溝跡、第 2 号井戸跡と重複し、第 1 号溝跡より古く第 2 号井戸跡より新しい。また、掘り込み自体の重複はないが、調査区壁面の土層観察では堆積土上面が第 12 号溝に切られていることが確認されている。

**平面形・規模** 北北西-南南東走行で直線状に走行する。走行方向はN-25°-Wである。両端ともに調査区外へ延びる。検出長は 8.72 m、第 1 号溝跡に中位から上方を切られているため遺存は良くな



第17図 第1号溝跡

い。幅は調査できた範囲で0.45～0.58mである。深さは遺存している第1号溝跡の側面から0.19m、確認面からは0.40～0.75mである。底面レベルは多少の上下はあるものの、おおむね北北西から南南東へ向かって下り傾斜となっていて、北北西端と南南東端での高低差は0.25mである。水路と仮定した場合、北北西から南南西に向かって流れていたと考えられる。

**断面形** 確認できた中位以下では逆台形である。

**堆積土** 暗灰黄色土が主体で、最下層を除き浅間B軽石が混入している。

**時期** 最下層に浅間A軽石の混入が見られないことから、同軽石降下以前には使用されていた状況にあり、最終的な埋没は同軽石降下以降と考えられる。

### 第3号溝跡 (第18図)

**位置** B・C-2グリッドに位置する。



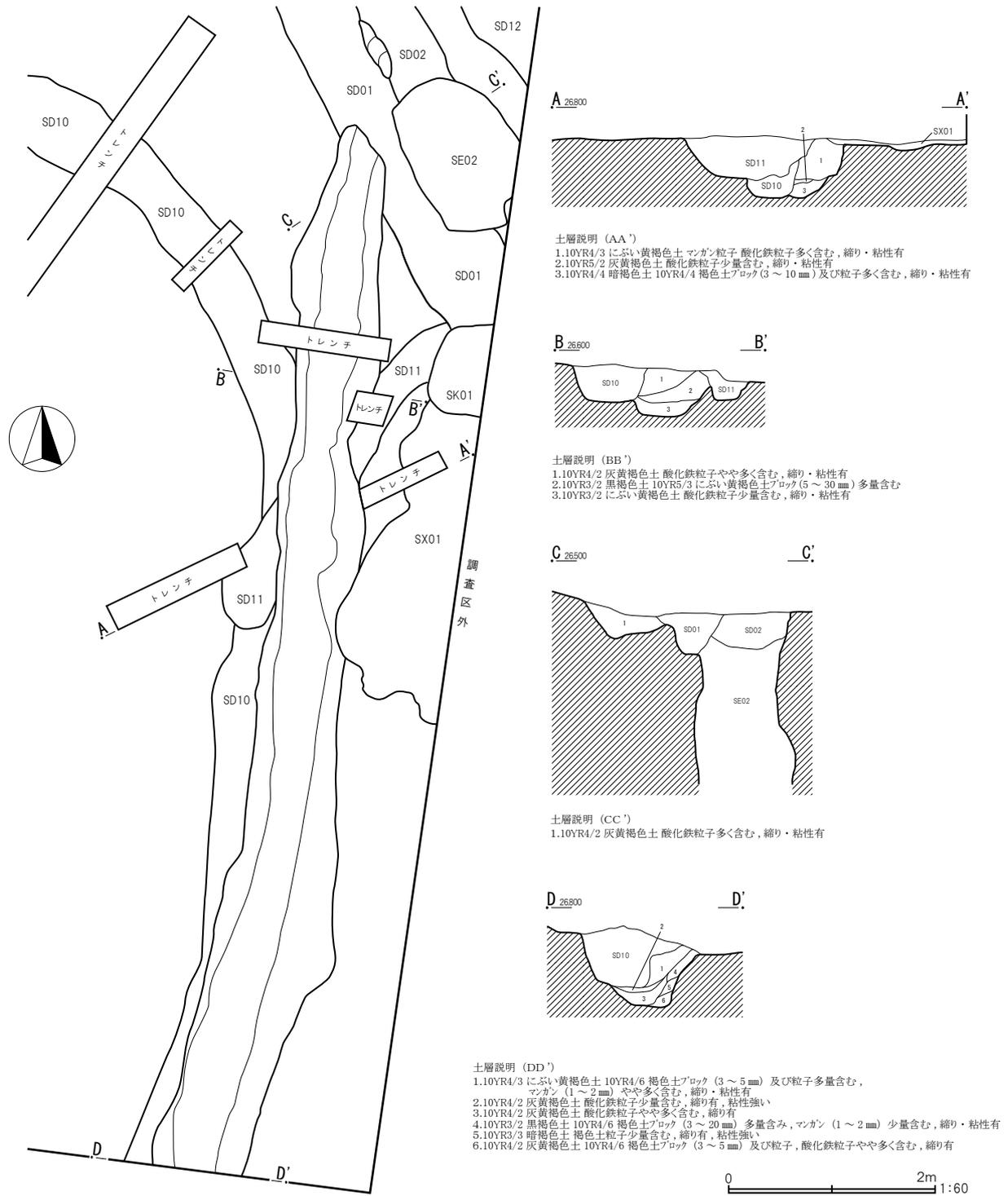
第 18 図 第 2・3号溝跡

**重複** 第 1 号溝跡と重複し、本遺構が古いと考えられる。

また、第 4 号溝跡の西側に第 4 号溝に切られる土層があり、これが第 3 号溝跡の堆積土の可能性もあり、北壁の土層のとらえ方によって新旧関係が異なってくる。北壁際に東西走行の本遺構が検出されたために、第 1・3・7 号溝跡の斬り合い関係が不明となっている。

**平面形・規模** 北北西—南南東走行で直線状に走行する。走行方向はN-35°-Wである。第 1 号溝跡内の西側面上から検出されたため遺存は良くない。北北西は次第に浅くなり消滅する。南南東では第 1 号溝跡の中央が逆台形上に深くなる部分によって切られる。遺存している最大長は 3.58 m、幅は 0.85 m、深さは第 1 号溝の側面から 0.21 m、遺構確認面から 0.50 m である。底面レベル差による流水の方向は、中央部がやや深く 0.02 ~ 0.04 m の起伏が見られるものの、傾斜の方向はとらえられなかった。

**断面形** 確認できた下位では「U」字状である。



第19図 第5号溝跡

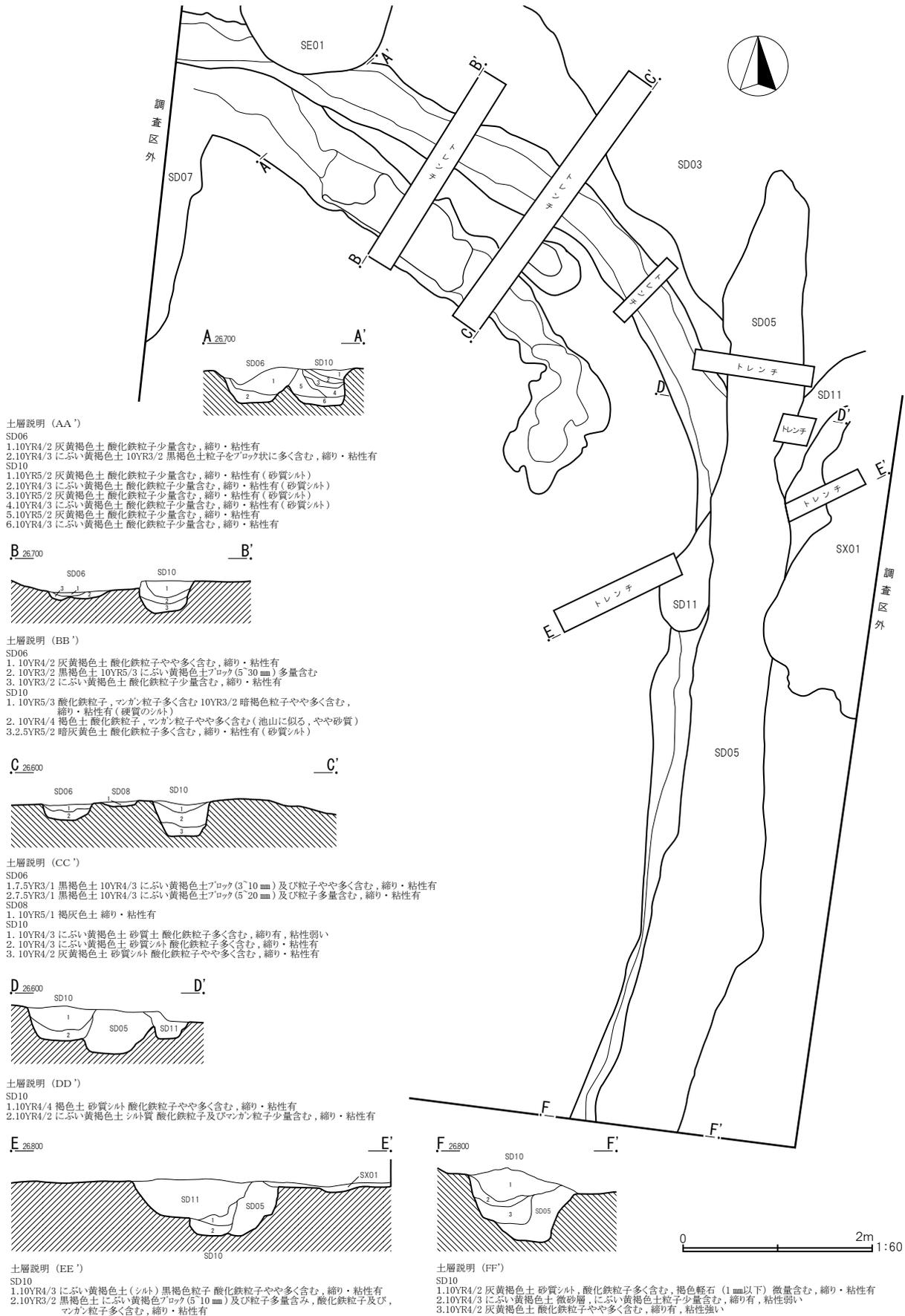
**堆積土** 1・2層は浅間B軽石を含む黒褐色土で特に2層は同軽石の混入比率が高い。

**出土遺物** 馬歯と考えられる骨を検出した。図示し得なかったが、写真図版7へ検出状況を掲載した。

**時期** 浅間B軽石が混入することから、同軽石降下以降の埋没と考えられる。

第4号溝跡(第21図)

**位置** B-1グリッドに位置する。



第 20 図 第 6・8・10号溝跡

**重複** 掘り込み自体の重複はないが、調査区北壁での土層観察では、本溝の上方を別の溝（第2・3号溝跡以外の第1号溝跡の西側に存在した第1号溝跡の古い段階のものか）によって切られている。また、西側には本溝に切られている溝のような土層が見られるが、これが第3号溝跡であった可能性もある。

**平面形・規模** 調査区北壁寄りに側壁の立ち上がりがわずかに確認されたのみで底面まで調査できていない。検出長は2.26 m、幅0.29 m、遺存している深さは0.50 mである。

**断面形** 不明。

**堆積土**（北壁SD04の土層注記全15層のうち、13・14層が本来の本溝の堆積土と考えられる）浅間B軽石を含む黒褐色土が堆積する。

**時期** 浅間B軽石が混入することから、同軽石降下以降の埋没と考えられる。

### 第5号溝跡（第19図）

**位置** C-3～5、B-5グリッド

**重複** 第1・10・11号溝跡、用途不明遺構と重複し、本遺構が最も古い。

**平面形・規模** ほぼ北-南走行で直線状に走行する。走行方向はN-9°-Eである。北端は第1号溝跡に切れ、南端は調査区外へ延びる。検出長は11.10 m、幅は1.10 mである。確認面からの深さは0.48 mである。底面には起伏があるものの全体を見るとほぼ水平に近く、傾斜の方向としてはとらえられない。

**断面形** ほぼ逆台形であるが、底面はやや丸みを帯びる。

**堆積土** マンガン粒や酸化鉄粒を比較的多く含む灰黄褐色土から暗褐色土が堆積する。

**時期** 堆積土中に軽石が含まれないことから、少なくとも浅間B軽石降下以前（古代）の埋没と考えられる。

### 第6号溝跡（第20図）

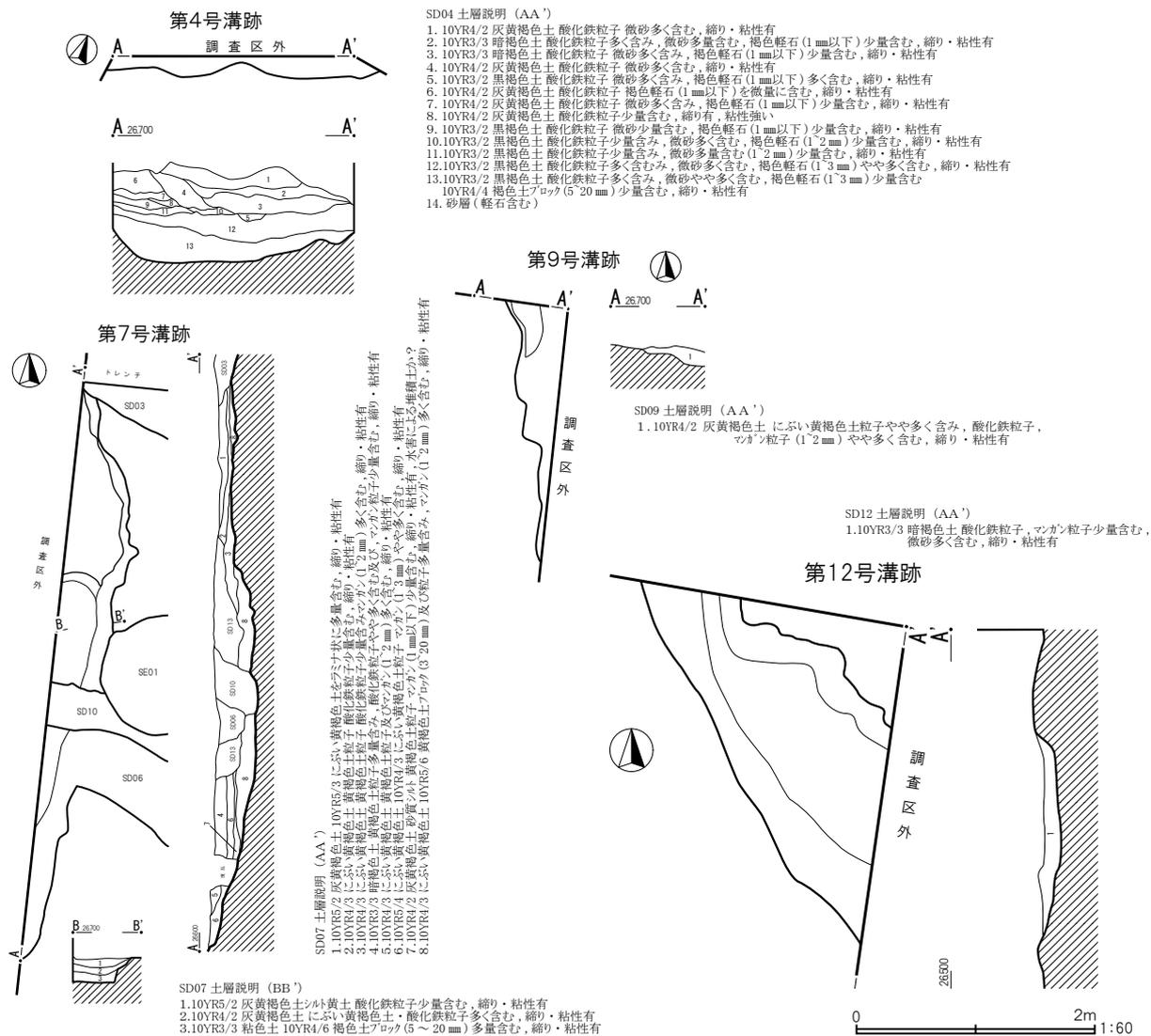
**位置** B-2・3グリッドに位置する。

**重複** 第7・10号溝跡と重複し本遺構がもっとも新しい。また、第8号溝跡と重複するが第8号溝跡の遺存が悪く、土層観察による新旧関係はとらえられなかった。

**平面形・規模** 北西-南東走行で直線状に走行する。走行方向はN-49°-Wである。北西端は調査区外へ延びる。南東端はB-3内で南西方向にほぼ直角に折れ曲り、底面は次第に凹凸が激しくなって次第に浅くなり消滅する。北西端から約2.40 mのところ段差があり、南西が高く北西は低くなっていて約0.13 mの高低差がある。検出長は6.47 m、幅は西寄りで0.78 m、折れ曲がった南東端で0.70 mである。確認面からの深さは最も深い西端で0.42 mである。底面レベルは南東で高く北西で低くなり、両端での高低差は約0.40 mである。水路と仮定した場合、南東から北西に向かって流水していたと考えられる。

**断面形** 「U」字状である。

**堆積土** 黄褐色土ブロックを含む黒褐色土を主体とする。北西寄りでは酸化鉄粒を含み、灰黄褐色を呈していて、色調、土質ともに地山に似る。



第21図 第4・7・9・12号溝跡

**時期** 堆積土中に軽石が含まれないことから、少なくとも浅間B軽石降下以前(古代)の埋没と考えられる。

**第7号溝跡(第21図)**

**位置** B-2・3グリッドに位置する。

**重複** 第6・10号溝跡、第1号井戸跡と重複し、本遺構が最も古い。北端での土層観察では本遺構を切る別の遺構の土層が確認されているが、これを第3号溝跡と捉えるか不明瞭である。

**平面形・規模** 調査区西壁に平行して検出されている。大半が調査区外にあると見られ、検出されたのは東側壁から底面にかけての部分である。南北走行で北寄りやや西に方向を変えている。走行方向はN-49°-Wである。底面は北端から2.40mのところ段差があり、北が高く南では低くなっている。0.25mの高低差がある。検出長は7.34m、検出された幅は最大で0.75m、確認面からの深さは南寄りで0.45m、北寄りで0.21mである。

**断面形** 「U」字状である。

**堆積土** 酸化鉄粒やマンガンを含む黄褐色土や灰黄褐色土を主体とする。

**時期** 堆積土中に軽石が含まれないことから、少なくとも浅間B軽石降下以前の埋没と考えられる。

#### 第8号溝跡（第20図）

**位置** B-2・3グリッドに位置する。

**重複** 第6・10号溝跡と重複するが本遺構の遺存が悪く、土層観察による新旧関係はとらえられなかった。

**平面形・規模** 北西-南東走行で直線状に走行する。走行方向はN-50°-Wである。第6号溝跡と第10号溝跡との間に検出された浅い溝である。両溝に切られるため遺存は良くない。北西端は第6・10号溝跡に切れ消滅する。南東端では次第に浅くなり消滅する。底面は比較的凹凸がある。検出長は3.29m、幅は最も遺存の良いところで0.50mである。底面レベルは26.37m前後であるが、遺存が悪くまた底面には凹凸があるため走行方向の高低差はとらえられなかった。

**断面形** 浅い「U」字状である。

**堆積土** わずかではあるが褐灰色土の堆積が認められている。

**時期** 堆積土中に軽石が含まれないことから、少なくとも浅間B軽石降下以前（古代）の埋没と考えられる。

#### 第9号溝跡（第21図）

**位置** C-1・2グリッドに位置する。

**重複** 掘り込み自体の重複はないが、調査区壁面の土層観察では第12号溝跡と重複し、本遺構が古い。

**平面形・規模** 南北走行で北東の調査区壁面にわずかに立ち上がりが検出されたのみである。検出長は2.32m、幅は0.38m、深さは0.08mで底面には達していない。主軸方向はN-9°-Wである。

**断面形** 西側壁の立ち上がりが確認されたのみで全容は不明である。

**堆積土** 浅間B軽石を含むにぶい黄褐色土やマンガンを含む灰黄褐色土が堆積する。

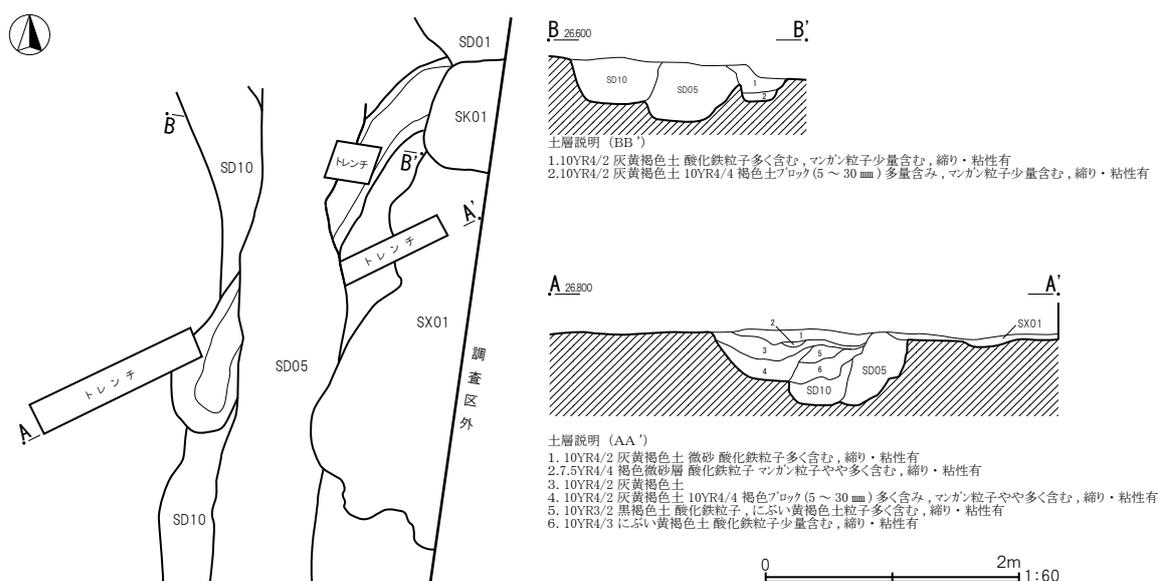
**時期** 浅間B軽石が混入することから、同軽石降下以降の埋没と考えられる。

#### 第10号溝跡（第20図）

**位置** B-2・3、C-3グリッドに位置する。

**重複** 第5・6・7・8・11号溝跡、第1号井戸跡と重複し、第5・7号溝跡より新しく第6号溝跡、第1号井戸跡より古い。また、第8号溝跡と重複するが第8号溝跡の遺存が悪く、土層観察による新旧関係はとらえられなかった。

**平面形・規模** おおむね北西-南東走行であるが、C-3グリッド内で湾曲して南方へ方向を変えている。走行方向はB-3グリッド内でN-60°-W、C-3グリッド内でN-28°-Wである。西端は調査区外へ延びる。検出長は15.74m、幅は0.50～0.73m、確認面からの深さは0.49m前後である。C-4グリッド内で緩く西方へ湾曲して第5号溝と一体となっている。底面レベルは標高26m前後で、あまり高低差は認められない。南壁での土層観察では本溝（4層から上方）と第5号溝跡の土層が確認



第 22 図 第 11 号溝跡

されている。

**断面形** 「U」字状である。

**堆積土** 酸化鉄粒はマンガンを含むにぶい黄褐色土や暗褐色土が堆積している。

**出土遺物** 土師器破片が微量出土している。1点のみ実測可能であったため、第 25 図へ図示した。

**時期** 堆積土中に軽石が含まれないことから、少なくとも浅間B軽石降下以前の埋没と考えられる。

### 第 11 号溝跡 (第 22 図)

**位置** C-2・3 グリッドに位置する。

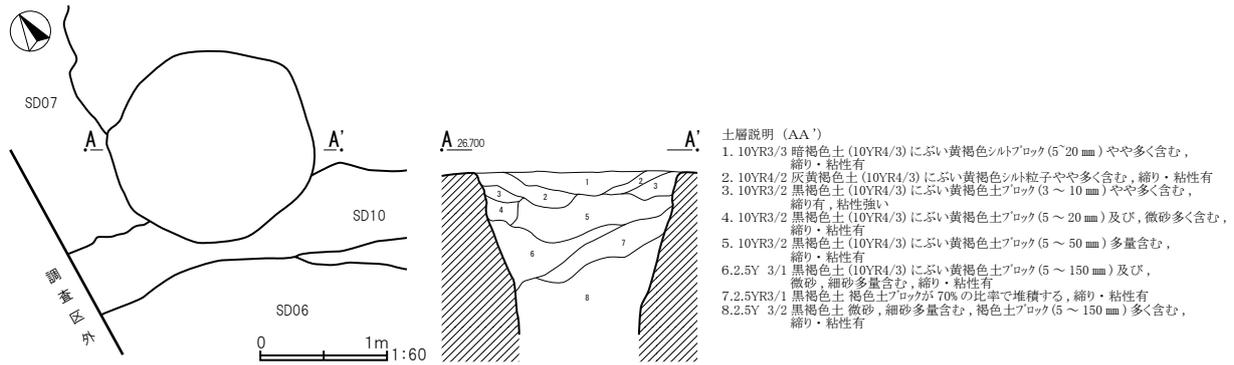
**重複** 第 5・10 号溝跡、第 1 号土壌と重複し、第 5・10 号溝跡より新しいことが確認されているが、第 1 号土壌との関係は第 1 号土壌が本溝を含め他遺構の掘削途中に検出されたため、直接土層の切り合いとしては観察できなかった。調査区東壁の土層観察では第 1 号溝跡の堆積土を本遺構は切っていないため、本溝が古いかあるいは同時期の埋没の可能性が高い。

**平面形・規模** 南西-北東走行でほぼ直線的である。北東は第 1 号土壌と重複しそれ以东は不明、南西は C-4 グリッド内で立ち上がっている。検出長は 3.60 m、幅は最大で 0.45 m である。走行方向はほぼ N-36°-W である。一部の検出のため明確ではないが、北東部と南西部で西方へやや湾曲している。土層観察で第 5 号溝跡より新しいことが確認されたが、新旧を誤って掘り下げたため重複部分は消失している。確認面からの深さは明瞭に確認された南西端部で 0.25 m である。底面レベルは 26.10 m 前後であるが遺存が悪く走行方向の高低差はとらえられなかった。

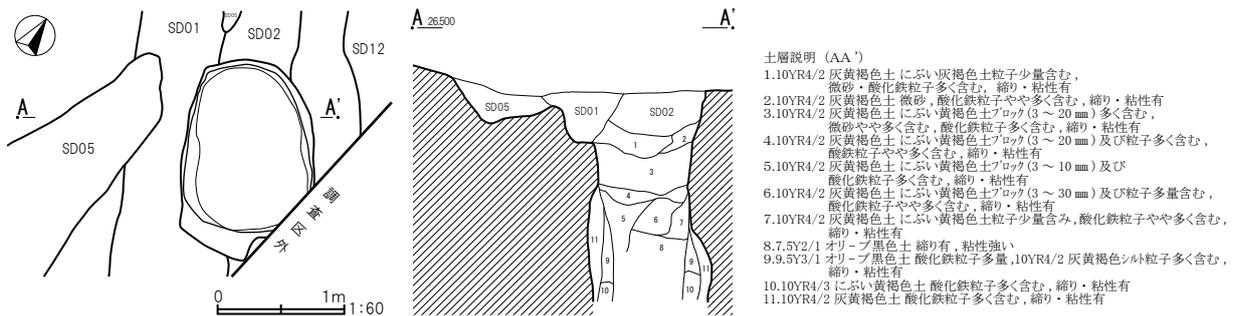
**断面形** 「U」字状である。

**堆積土** 灰黄褐色土を主体とし、マンガンや酸化鉄粒を含んでいる。また、下層には褐色土ブロックの混入が目立つ。

**時期** 堆積土中に軽石が含まれないことから、少なくとも浅間B軽石降下以前の埋没と考えられる。



第 23 図 第 1 号井戸跡



第 24 図 第 2 号井戸跡

### 第 12 号溝跡 (第 21 図)

**位置** C-2 グリッドに位置する。

**重複** 掘り込み自体の重複はないが、調査区壁面の土層観察では第 9 号溝跡と重複し、本遺構が新しい。

**平面形・規模** 北西-南東走行で北西及び南東ともに調査区外へと延びている。検出されたのはわずかであり詳細は不明であるが、わずかながら東に湾曲している様子がうかがえる。検出長は 3.06 m、幅は 1.23 m 前後、確認面からの深さは 0.16 m 前後である。底面は凹凸がある。走行方向は N-39°-W である。底面レベルは 26.10 m 前後であるが遺存が悪く走行方向の高低差はとらえられなかった。

**断面形** 浅い「U」字状である。

**堆積土** 砂粒や浅間 B 軽石を含む黒褐色土が堆積する。

**時期** 堆積土中に浅間 B 軽石が混入することから、同軽石降下以降の埋没と考えられる。

## (2) 井戸跡

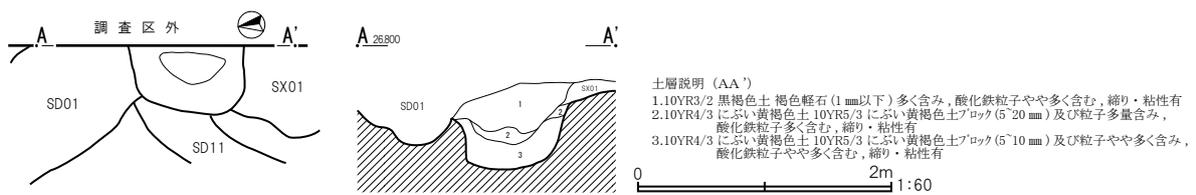
### 第 1 号井戸跡 (第 23 図)

**位置** B-2 グリッドに位置する。

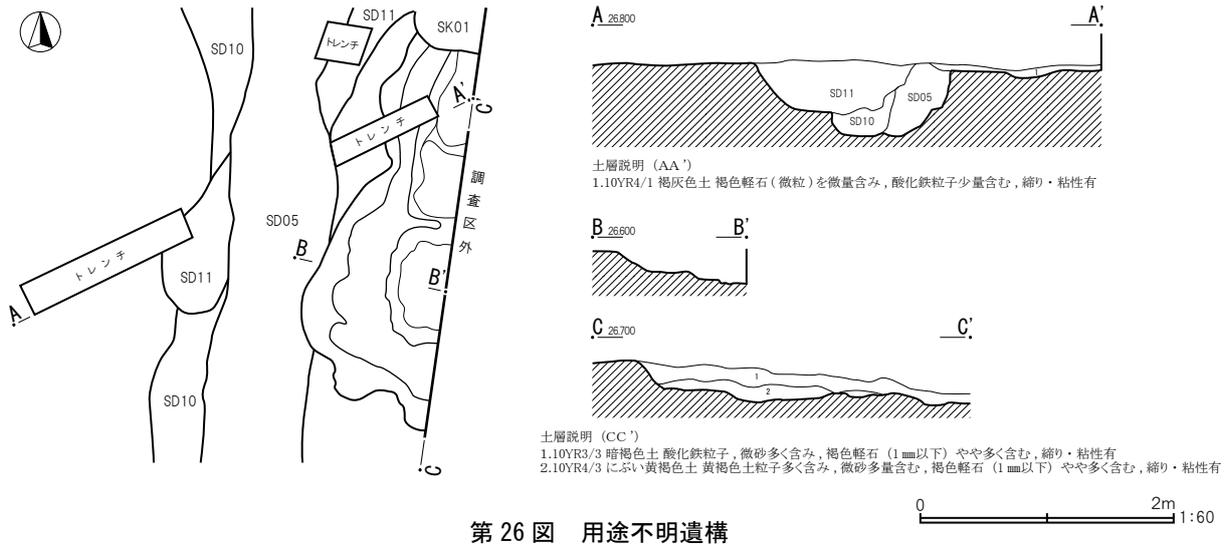
**重複** 第 6・7・10 号溝跡と重複し、本遺構が最も新しい。

**平面形・規模** 長軸 1.61 m、短軸 1.49 m の楕円形で、深さは確認面から 1.3 m 掘り下げた地点で湧水が発生したため、掘削が不可能になり不明である。

**断面形** 上方はロート状に開いているが、下方はほぼ垂直になり筒状である。



第25図 第1号土壌



第26図 用途不明遺構

**堆積土** 遺跡内の他遺構に比してしまりが弱い。黒褐色土を基調としているが、にぶい黄褐色土ブロックが層によっては多量に含まれ、これの混入比率によって分層された。人為的堆積と考えられる。

**時期** しまりが弱い堆積土の状況から比較的新しい時期が考えられるが詳細は不明である。近隣の住民によると、明治時代にこの周辺で灌漑用の井戸を数多く掘ったとのことである。

### 第2号井戸跡 (第24図)

**位置** C-3グリッドに位置する。

**重複** 第1・2号溝と重複し、本遺構が最も古い。

**平面形・規模** 長軸1.21m、短軸1.10mの楕円形で、深さは確認面から2.10m掘り下げた地点で湧水があり、掘り下げを断念したため不明である。

**断面形** 側壁は上方でわずかに開いて立ち上がっている。下方では側壁は崩落したと見られ、やや湾曲している。

**堆積土** 1~7層は地山のにぶい黄褐色土ブロックや酸化鉄粒を含む灰黄褐色土、7・8層は腐食性の強いオリーブ黒色土が堆積する。9層はオリーブ黒色土を主体としているが灰黄褐色土粒を多く含んでいる。10層はにぶい黄褐色土、11層は灰黄褐色土で上方の側壁が崩落したものと考えられる。8層から上方の堆積状況はレンズ状とは捉えがたく、側壁の崩落後に人為的に入れられたものと考えられる。

**時期** 堆積土中に軽石が含まれないことから、少なくとも浅間B軽石降下以前の埋没と考えられる。

### 第1号土壙（第25図）

**位置** C-3グリッドに位置する。

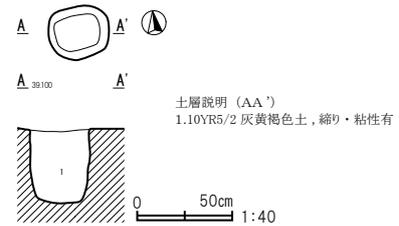
**重複** 第1号溝跡、用途不明遺構と重複し、用途不明遺構より新しく第1号溝跡より古い。

**平面形・規模** 東側が調査区外となり全容は不明である。南北軸0.69 m、東西軸は調査できた範囲で0.44 mである。

**断面形** 「U」字状である。

**堆積土** 1層は浅間B軽石を含む黒褐色土、2・3層はにぶい黄褐色土ブロックや酸化鉄粒を含むにぶい黄褐色土である。

**時期** 堆積土中に浅間B軽石が混入することから、同軽石降下以降の埋没と考えられる。



第27図 ピット

## （3） その他の遺構

### 用途不明遺構（第26図）

不整形で底面は凹凸があることから、人為的な掘り込みではない可能性がある。

**位置** C-3・4グリッドに位置する。

**重複** 第1号土壙、第5号溝跡と重複し、第5号溝跡より新しく第1号土坑より古い。

**平面形・規模** 東側が調査区外となり全容は不明であるが、不整形な形状である。底面は凹凸が激しい。第5号溝跡と重複している部分では本遺構が新しいと判断し掘り下げを開始したが、堆積土の境界が明瞭ではなくやむを得ず断面にて確認を行ったため、消失している。浅い落ち込みが第5号溝跡以西にも確認されている。調査できた範囲で南北軸4.69 m、東西軸は2.97 mである。

**断面形** 浅い皿状である。

**堆積土** 1層は暗褐色土、2層はにぶい黄褐色土でいずれも褐色軽石（浅間Bまたは浅間C軽石か）を含み、また、微砂を多量に含んでいる。

**出土遺物** 土師器細片が出土している。

**時期** 土師器細片が出土しているが流れ込みの可能性もあり、特定し得なかった。

### ピット（第27図）

**位置** B-4グリッドに位置する。

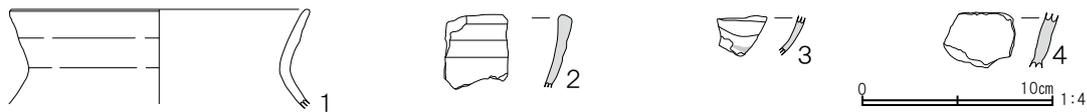
**平面形・規模** 長軸0.29 m、短軸0.27 mの隅丸方形で、深さは確認面から0.33 mである。

**堆積土** 灰黄褐色粒子を少量含む、黒褐色土であり、締りがよく粘性がある。

**時期** 不明。

## （4） 出土遺物

出土遺物は第28図及び第6表にまとめて掲載した。出土量は僅かであり、図示し得たのは土師器甕1点、陶器片3点の計4点である。これらの状況からも、今回の調査地点は集落エリアからは離れていることがうかがえる。



第 28 図 出土遺物

第 6 表 出土遺物観察表

番号	出土地点	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	10号溝跡	土師器甕	(15.3)	(5.3)	-	ACGIJN	灰色	普通	口縁部片	内外面磨耗
2	表土	陶器碗?	-	-	-	ACH	灰白色	良好	口縁部片	全面に釉薬、胎土荒い
3	1号溝跡	陶器	-	-	-		明オリーブ灰色/赤褐色	良好	体部片	透明の釉薬ハケ塗り
4	1号溝跡	陶器	-	-	-	N	白灰色	良好	体部片	外面に釉薬、胎土荒い

## 4 調査のまとめ

本遺跡は今回が初めての調査である。現状では、表面採取等により古墳時代の集落跡が存在するものと推定されているに過ぎなかった。ここでは、調査成果を踏まえ、遺跡の状況を整理し調査のまとめとする。

今回の調査において、集落に係る直接的な遺構の検出はなく、水田経営などの生業に係るエリアであることを確認した。耕地整理等により旧地形を留めていないが、調査地点は現在の福川の右岸であり、後背湿地と考えられ、水田経営に適した場所といえる。生活の場である集落は微高地である自然堤防上と考えられるが、旧地形は姿を留めておらず、不明である。出土した土師器片から、奈良・平安時代には水路が機能していたようであり、時期的には本遺跡の周辺に展開する鷲ヶ谷戸遺跡や高林遺跡などと同時代に、開発が及んだものと考えられる。遺跡の規模や詳細が明らかでないため、遺跡間の関連性や位置付けは不明である。

出土遺物は、土師器片と陶磁器片であり、量的には極めて少ない。しかし、溝跡は幾重にも重なっており、継続して使用された要素が強い。このことは、今回の調査地点は、居住に向く空間ではなく、昔から生産の場として機能してきたことを意味する。

この地域は、平安時代には長井庄と称された地である。推測にすぎないが、墾田永年私財法により奈良時代後半から始まり、平安時代中期に広がった荘園のための大規模開墾による開発が調査地点でみられた溝跡の最古の段階なのかもしれない。

今回の調査では、以上のような状況が確認された。今後は、さらなる成果の集積を待って、遺跡の詳細が明らかになることを期待したい。

# 写 真 图 版

図版1 瀬戸山遺跡



全景（北西から）



第1号住居跡（南から）



第1号住居跡（南東から）



第1号住居跡 遺物出土状況（南から）



第1号住居跡 東側カマド（西から）

図版2 瀬戸山遺跡



第1号住居跡 北側カマド（南から）



第2号住居跡（南から）



第2号住居跡（南東から）



第2号住居跡 遺物出土状況（南から）



第2号住居跡 東側カマド（西から）



第2号住居跡 北側カマド（南から）



第1号土坑（北東から）



ピット群（北西から）

図版3 瀬戸山遺跡



第1号住居跡 第7図1



第1号住居跡 第7図2



第1号住居跡 第7図7



第1号住居跡 第7図8



第1号住居跡 第7図9



第1号住居跡 第7図11



第1号住居跡 第7図12



第1号住居跡 第7図13



第1号住居跡 第7図14



第1号住居跡 第7図15

図版4 瀬戸山遺跡



第1号住居跡 第7図10



第1号住居跡 第7図17



第1号住居跡 第7図16



第2号住居跡 第9図1



第2号住居跡 第9図2



第2号住居跡 第9図5



第2号住居跡 第9図6



第2号住居跡 第9図7



第2号住居跡 第9図8



第2号住居跡 第9図9



第2号住居跡 第9図10

図版5 瀬戸山遺跡



第2号住居跡 第9図11



第2号住居跡 第9図12



第2号住居跡 第9図13



第2号住居跡 第9図14・15



第2号住居跡 第9図16



第2号住居跡 第9図18



第2号住居跡 第9図19



第2号住居跡 第9図20



第2号住居跡 第9図21



第1号土坑 第10図1

図版6 山ヶ谷戸遺跡



全景（南から）



全景（北から）

図版7 山ヶ谷戸遺跡



第4号溝跡（東から）



第7号溝跡（南から）



第9号溝跡（南から）



第12号溝跡（西から）



第3号溝跡馬歯出土状況（北から）



第1号井戸跡（南から）



第2号井戸跡（北西から）



出土遺物 第25図1・2

第25図3・4

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	せとやまいせき・やまがやどいせき							
書名	瀬戸山遺跡・山ヶ谷戸遺跡							
副書名	熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	—							
編集者名	蔵持 俊輔							
編集機関	埼玉県熊谷市遺跡調査会							
所在地	〒360-8601 熊谷市宮町 2-47-1 TEL048-524-1111							
発行年月日	西暦2011(平成23)年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(° ' ")	(° ' ")		(㎡)	
せとやまいせき 瀬戸山遺跡	くまがやしやぎいあぎぬまがみ 熊谷市楊井字沼上 1657番地1	11202	59-028	36° 06' 24"	139° 22' 37"	20091001 ～ 20091106	165.00	携帯電話 用電波塔 建設工事
やまがやどいせき 山ヶ谷戸遺跡	くまがやしかみねあぎむかいまえた 熊谷市上根字向前田 947番地	11202	61-073	36° 12' 18"	139° 22' 48"	20090907 ～ 20090928	179.93	携帯電話 用電波塔 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
瀬戸山遺跡	集落跡	奈良・ 平安時代	住居跡2軒 土坑	土師器・須恵器 鉄製品		集落が南へ広がっていることが確認された。		
山ヶ谷戸遺跡	用水路跡	古墳～ 近世	溝跡	土師器・陶器		福川を水源とする用水路が継続使用されたことを確認した。		

熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

# 瀬戸山遺跡・山ヶ谷戸遺跡

平成 23 年 3 月 31 日発行

発行／埼玉県熊谷市遺跡調査会

印刷／株式会社 ぎょうせい